

酒野谷原塚

—安全な川づくり事業費（補助）一級河川大芦川に伴う発掘調査—

2020.2

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

さけ の や はら づか
酒野谷原塚

—安全な川づくり事業費（補助）一級河川大芦川に伴う発掘調査—

2020. 2

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

序

酒野谷原塚は、栃木県の中央部、鹿沼市に位置しています。鹿沼市は古くから商業、林業、農業が盛んであり、文化遺産も多く残されています。また、足尾山地と、そこを源とする思川、大芦川、黒川などの清流が育んだ豊かな自然にも恵まれています。本遺跡も栃木県を代表する清流大芦川の沿岸に位置しています。

この度、栃木県県土整備部による一級河川大芦川河川改修事業に先立ち、事業地区内に所在する遺跡の取扱いについて、関係機関と協議の上、令和元(2019)年8月から記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

発掘調査では、地元で水天宮として祀られてきた塚から、石祠・陶磁器が出土し、近世以降に構築されたことが分かりました。しかし、10月12日、台風19号がもたらした大芦川の増水により流失してしまいました。先人の築いた貴重な文化遺産が調査の途中で失われたことは非常に残念です。

本報告書は、酒野谷原塚の発掘調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいたしました栃木県県土整備部、鹿沼市教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和2(2020)年3月

栃木県教育委員会
教育長　荒川　政利

例　言

- 1 本書は、栃木県鹿沼市酒野谷地内に所在する酒野谷原塚の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、一級河川大芦川河川改修工事に伴う発掘調査である。
- 3 調査は、栃木県土整備部の委託事業であり、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導のもと、公益財団法人とちぎ未来づくり財團に委託して実施した。
- 4 発掘調査・整理作業・報告書制作作業までの担当者は以下のとおりである。

発掘調査

副所長　藤田　典夫、調査課長　篠原　祐一、発掘担当者　調査嘱託員　植木　貴志
整理・報告書作成

副所長　藤田　典夫、整理課長　津野　仁、整理担当者　調査嘱託員　植木　貴志

- 5 本書の執筆・報告書作成は植木が担当した。
- 6 本書の作成にあたり、津野　仁・池田　敏弘・龜田　幸久・芹澤　清八・篠原　浩恵・篠原　祐一・
加藤　俊樹・岩井　かほり・杉山　真理の協力を得た。
- 7 陶磁器については、長佐古　真也・山下　峰司・石井　たま子・水本　和美から御教示を賜った。
- 8 調査・整理作業にあたり、以下の委託業務を実施した。
　　航空写真撮影・航空写真測量・基準点測量は株式会社シン技術コンサル栃木営業所に委託した。
- 9 発掘調査の実施ならびに報告書作成にあたり、次の機関からご指導・ご協力を賜った。
　　栃木県教育委員会文化財課・県土整備部鹿沼土木事務所・鹿沼市教育委員会（順不同）
- 10 発掘調査・整理作業・報告書作成参加者は次の通りである。
　　（発掘作業員）坂村　光男・塙谷　昂造・高橋　麻佐美・高山　文雄・佐藤　圭子・山内　愛子・
　　米山　良平
　　（整理作業員）有馬　由乃

- 11 本遺跡の出土遺物・資料類は、栃木県埋蔵文化財センターにて保管している。

凡　例

- 1 酒野谷原塚の略称は「KA-SK」である。
- 2 塚の測量図は世界測地系の座標に基づき、標高は海拔標高である。
- 3 第5図の作成は国土地理院発行の5万分の1「鹿沼」と「宇都宮」を合成して、その一部を複写して使用している。
- 4 土層注記及び遺物色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所　色票監修1998『新版　標準土色帖』に依拠した。
- 5 本文中で「地山」と表現した地層は、大芦川により形成された河川堆積砂礫層を意味する。
- 6 本報告書掲載の遺構の縮尺は図の脇に示した。陶磁器類の実測図は縮尺1/3、石製品（祠）は1/5である。
- 7 陶磁器類は写真を左に、実測図を右に示した。
- 8 遺物写真図版の縮尺は不統一である。また、写真図版中の番号は、遺物実測図の番号に対応する。

目 次

序文	
例言・凡例	1
目次・挿図目次・表目次・図版目次	ii
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
第2章 遺跡の環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の成果	13
第1節 遺構	13
第2節 遺物	21
第4章 総括	24
第1節 塚の伝承	24
第2節 本塚と構築方法が類似する例	25
第3節 塚西側で検出した石組について	25

挿 図 目 次

第1図 大芦川河川改修事業計画略図	1	第11図 酒野谷原塚 土層断面図2 (1/60)	20
第2図 酒野谷原塚 基本土層図	4	出土陶器実測図(1)	21
第3図 酒野谷原塚 位置図	5	出土陶器実測図(2) 石製品実測図	22
第4図 鹿沼市周辺の地形図	5	石造物(石祠)実測図(1/5)	23
第5図 周辺の道路	7	酒野谷原塚 復元想定復元	24
第6図 酒野谷原塚調査区範囲及びトレーンチ配置図(1/100)	14	叶花古墳測量図	25
第7図 参道・石列検出位置	15	石堤部分名称 及 略横断面模式図	26
第8図 酒野谷原塚 遺構平面図(1/60)	15	酒野谷周辺 大芦川堤防及び土手位置図	26
第9図 酒野谷原塚 土層断面図1 (1/60)	17	石堤石積模式図	28
第10図 塚北側石組検出位置	19		

表 目 次

第1表 酒野谷原塚 周辺遺跡一覧表	8	第4表 酒野谷原塚 出土陶器観察表	22
第2表 鹿沼市内の塚分布表	10	第5表 酒野谷原塚 出土石製品観察表	23
第3表 墓記載古文書一覧	11		

図 版 目 次

図版一	遺構遺景	
	酒野谷原塚 遠景 (南西上空から)	
	酒野谷原塚 遠景 (南東上空から)	
	酒野谷原塚 遠景 (西上空から)	
	酒野谷原塚 遠景 (南上空から)	
	酒野谷原塚 遠景 (北上空から)	
	遺構全貌	図版四
	酒野谷原塚 全景 (真上から)	
	酒野谷原塚 全景 (東から)	
	酒野谷原塚 全景 (南から)	
	酒野谷原塚 全景 (北西から)	
	酒野谷原塚 全景 (南から)	
図版二	遺構全貌	
	酒野谷原塚 全景 (真上から)	
	酒野谷原塚 全景 (東から)	
	酒野谷原塚 全景 (南から)	
	酒野谷原塚 全景 (北西から)	
	酒野谷原塚 全景 (南から)	
	遺構	
	酒野谷原塚 南全貌 (南東から)	
	北側調査風景 (北から)	
	北側A-B'土層断面 (1) (西から)	図版五
	北側B-B'土層断面 (2) (西から)	
	北側C-B'土層断面 (1) (北から)	
図版三	遺構	
	酒野谷原塚 南全貌 (南東から)	
	北側調査風景 (北から)	
	北側A-B'土層断面 (1) (西から)	図版六
	北側B-B'土層断面 (2) (西から)	
	北側C-B'土層断面 (1) (北から)	
	遺構	
	調査地点 流失前現況 (北から)	
	調査地点 流失状況 (北から)	
	遺物	
	祠①～⑧	

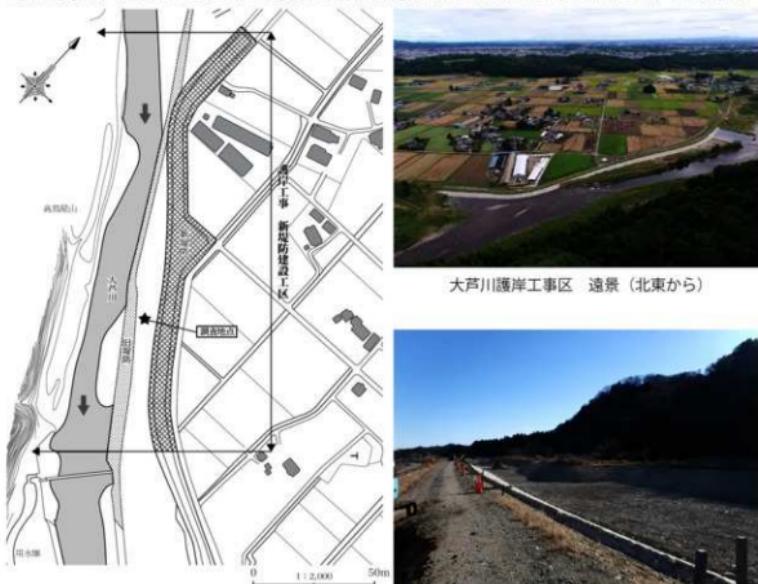
第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯（第1図）

栃木県土整備部が実施する一級河川大芦川河川改修事業は、例年のように襲う台風や豪雨による河川氾濫による家屋・水田等の浸水被害を防ぐために計画された事業である。これまでにも局所的な河川改修を行ってきたが、特に昭和57年9月、平成3年8月、平成13年8月の台風による河川氾濫では大芦川流域に甚大被害をもたらした。大芦川流域の地元住民や鹿沼市からは、早期に氾濫防止対策を実施するよう要望されていた。その対策として県土整備部は、ダムによる治水対策を計画していたが、平成15年9月に栃木県公共事業再評価委員会の審議を経て、大芦川総合開発事業（東大芦川ダム）の中止を決定し、治水代替案として河川改修を実施することとした。河川改修事業は国庫補助を得て、思川合流地点（鹿沼市佐目）から、県道引田橋（鹿沼市引田）までの約13.2kmを改修計画区間とした。大芦川はこれまで抜本的な河川改修を行ってこなかった為、川幅も狭く、連年の洪水により上流から多量の疊や土砂の堆積が進み、著しく流下能力が低下していた。その為、本事業により川幅の拡張、河川内の掘削、築堤を行い、川積を拡大することで氾濫を防ぎ、洪水被害を防ぐことを目的として事業が進められている。

こうした状況下、平成25年10月に県土整備部から県教育委員会文化財課へ本事業の照会が行われ、酒野谷地区の大芦川河川改修事業計画地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議が行われた。

県文化財課は、平成25年11月に当該地区における遺跡の所在調査を行った。調査の結果、事業計画地内に酒野谷原塚が存在すること、工事を実施する場合には発掘調査が必要であることを回答した。その後、県



第1図 大芦川河川改修事業計画略図

大芦川護岸工場（北から）

土整備部から、酒野谷原塚が位置する大芦川旧堤防付近は川幅が狭小なため拡幅が必要があること、旧堤防の内側に新堤防を建設し、旧堤防付近は川床面まで取り除く計画案が示された。県土整備部と県文化財課の協議の結果、酒野谷原塚を保存することは不可能であり、河川事業の進捗に合わせ本塚の調査を実施することになった。

平成 29 年 10 月から酒野谷原塚周辺の堤防・掘削工事が始まり、平成 30 年 3 月には旧堤防と、その周辺を帶状に残し新堤防工事は完成した。平成 30 年 6 月、県土整備部鹿沼土木事務所から県文化財課に、平成 31 年度に酒野谷原塚及び旧堤防の撤去工事に着手したいとの要請があり、県文化財課と県土整備部の協議・調整の結果、平成 31 年に発掘調査を実施する方向で調整することになった。

平成 30 年 6 月 29 日付けで、文化財保護法第 94 条開発通知が栃木県鹿沼土木事務所所長から県文化財課に提出される。それを受け、県文化財課は鹿沼土木事務所に、事前に発掘調査の実施が必要である旨を通知した。平成 30 年 8 月 29 日に鹿沼土木事務所と県文化財課が協議し、平成 31 年度に発掘調査に向けての協議・調整を行い、平成 31 年 1 月 24 日に鹿沼土木事務所・県文化財課・埋蔵文化財センターで現地協議を行い、発掘調査を実施することになった。令和元年 7 月 29 日付けで、県教育委員会文化財課長から公益財団法人とちぎ未来づくり財団理事長に酒野谷原塚発掘調査の費用見積りが依頼された。これを受け、財団理事長から文化財課長に同日費用見積りの回答がなされた。さらに同日付けで、文化財課長から財団理事長に契約締結の依頼文が送付され、栃木県知事と財団理事長間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約が締結された。調査面積は 160m²で、現地における発掘調査は、令和元年 8 月から 10 月まで実施し、整理作業・報告書作成作業は、令和元年 12 月～令和 2 年 2 月まで行い、年度内にこれまでの発掘調査結果を報告書として刊行することにした。

第2節 調査の方法と経過（第2回）

1. 調査の方法

発掘調査面積は 160m²である。塚及び塚周辺の除草・伐採が終了した時点で、現況の航空写真撮影及び航空写真測量、基準点測量を実施した。

グリッド杭は、国土方眼座標第 IX 系を基準とし、10m 四方に設定した。グリッド東西ラインはアラビア数字を、南北ラインはアルファベットを付し、東方向及び北方向の降順となるようにした。グリッド杭は、西辺グリッドラインのアルファベットと北辺のグリッドラインのアラビア数字の組み合わせで表記した。

セクションベルトは、塚平面形から主軸を推定し、南北に 1 本、東西に 3 本を設定した。また、遺構の状況によって、適時セクションベルトを設置した。

遺構の調査は、塚中央部分に位置する根株周辺を東西 8 m、南北 3.5 m 残して、他の部分を人力で掘り下げて調査した。遺構の掘り下げは、土層観察用のベルトを設定して行い、土層図を 1/20 の縮尺で作成し、写真撮影後除去することにした。平面図は平板を用いて 1/20 の縮尺で作成することにした。

2. 調査の経過

調査区は旧堤防沿いの南北 16m、東西 10m の範囲である。西側は大芦川、北東から東側にかけては新堤防及び河川改修工事により、新堤防から塚際まで幅 10 ~ 15m、深さ 4 m 削平されていた。その為、調査区と旧堤防が大芦川の中に南北に細長く島状に取り残された状態であった。調査地点に行くには、調査事務所から大きく北側に迂回しなければ辿り付かない状態であった。

発掘調査は 9 月上旬～ 10 月下旬までの予定で開始した。現地における現況確認後、発掘作業員の募集、関

係諸機関との調整等を済ませた後、調査を開始した。塚及び調査区までの通路の現況は、雑草木が密に生い茂り、調査対象の塚も視認出来ない状態であった。その為、除草作業から調査は始まった。この除草作業だけで8日を要した。除草作業の途中で、塚中央部に位置する御神木の根根株が、塚の盛土内に縦横に根を伸ばしていることが判明した。また、塚の頂部を除草中に根株の北側から、祠の屋根や袋部が根株に巻き込まれた状態で出土した。無理に祠を取り外そうとすると壊れてしまうので、調査終了時に根株を切断しとり外すこととした。当初は、根株を重機により除去することも想定していたが、大木の根株を取り除くことの出来る重機が、調査地点まで走行することが困難であることから、根株周辺の南北3.5m、東西8.0mの範囲を残し、他の部分は人力で掘り下げることにした。

調査区及び周辺の除草作業が終了後、9月の第3週目に基準点測量・現況測量・航空写真撮影を行った。その後、セクションベルトを設定して遺構の掘り下げ作業を開始した。当初は、塚北側から盛土の掘り下げ作業を進めたが、盛土内の御神木の根が縦横に張っていたことや、多量の大形礫が盛土中に含まれていることから、調査はなかなか進捗しなかった。

9月の4～5週目からは、塚南側の調査を始めた。塚の表土を除去し、若干盛土を掘り下げた段階で、南東部から礫が散かれたような状態で検出した。当初はこの礫敷の性格が不明であったが、礫敷の隅角部及び裾部には0.2m大の礫を意図的に据えた状態で確認出来たことから人工的に構築していることが判った。礫敷きは南側調査範囲南北約8.0m、東西7.0mの範囲で確認出来たが、D-D'セクションベルト手前で直角に東に曲がることが確認出来た。その為、塚南側に新たにトレンチを入れ、礫敷の範囲の確認を行った。

10月第1週目に、塚の西側範囲を確認するため、新たにF-F'、E-E'のセクションベルトを設定した。さらに北西側にも2本のセクションベルトを設定したが、地表面が非常に硬く、スコップも通さない状態であった。近年に、重機により踏み固められたものと考える。

塚西側裾部を0.1～0.2m掘り下げた段階で、0.2～0.4m大の礫が組まれた状態で検出した。さらに掘り進めると、大芦川に向かって傾斜しながら深さ1.0m以上石組みが続いていることが判明した。ただ、塚の西側は、金属（冷蔵庫・家電など）廃油・ガラスの破片などの産廃が非常に多く埋められており（平成元年前後産廃）、これ以上調査を進めることは怪我する危険があると判断し、西側セクションベルトの調査を一時停止した。10月に入った段階で、塚の南側と北側から検出した礫敷の調査に多くの時間が取られること、塚の西側で新たに石組が検出したことから、調査期間を考慮して、作業員には掘り下げ作業を優先してもらい、写真撮影・図面作成を後回しにした。

10月10～11日には、所長・副所長・調査課長から、12日前後に関東地方に大型の台風19号が上陸するとの予報から、現場の安全管理、テント・脚立類の機材を、新堤防上の調査事務所に移動するよう指示を受けた。その他の発掘機材は、現場でブルーシート等で厳重に梱包し、大風などで機材が飛ばないように対策を講じた。

10月12日、台風19号が関東・東北地方に甚大な被害もたらした。鹿沼市も各所で堤防決壊や河川氾濫が起り、甚大な被害を被ったことがマスコミで伝えられた。

10月13日、副所長・調査課長に電話連絡し、調査現場までの交通路は台風被害をあまり受けず安全であること、調査区のある大芦川は氾濫・決壊情報が公の機関及びマスコミ等の情報では伝えられていないことから、現場の状況確認することにした。しかし、調査現場に行くと、大芦側は新堤防際まで増水し、調査区は完全に水没し、確認出来ない状態であった。調査区までの通路である旧堤防も完全に流失していることから、調査区が甚大な被害を受けていることが想定された。急遽、調査課長・副所長に連絡し、対応を協議した。

協議の結果、調査区が完全に水没している状況なので、水量が下がるのを待って今後の対応を判断することにした。

10月14日、現場の状況を再度確認する。水位が若干下がり調査区の状態が把握出来た。塚の中央部に位置していた大木の根株が流失していること、旧堤防がコンクリート残骸しか確認出来ないことから、調査区自体も流失している可能性が高いことが想定された。

10月16日、県文化財課と埋蔵文化財センターで協議し、これ以上の調査は不可能と判断し、現地調査は打ち切る方針が決まる。

10月17日以降、県土整備部鹿沼土木事務所・鹿沼市教育委員会に調査終了に至った理由・現状の説明を行う。県土整備部鹿沼土木事務所・鹿沼市教育委員も現地を視察、状況の確認を行う。

10月30日の現場事務所・器材を完全に撤収し、現地調査は終了する。

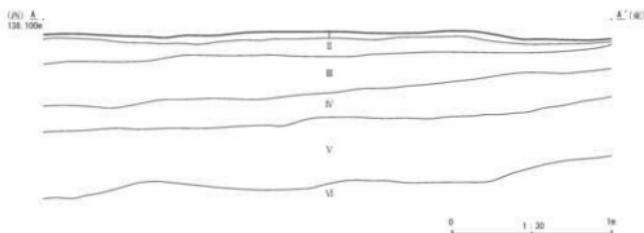
3. 整理作業・報告書刊行作業

整理作業・報告書作成は、令和元年12月2日から令和2年2月末まで埋蔵文化財センターで実施した。発掘調査による遺物は収納ケース5箱、遺構図面12枚である。整理作業は、遺物の選別、注記、接合・復元・実測・トレース作業を行った。実測遺物及び写真に掲載する遺物については、比較的全体の復元しえるものを選択して写真撮影した。

遺構については、図面類の整理を最初に行い、コンピュータートレースを委託して、作図・レイアウトの作成を行った。併せて、原稿作成や遺物観察表を作成し、全体を割り付けて入植した。割り付けに際しては、遺構・遺物・遺物観察表の順で掲載した。これによって三者を一体として理解しえるようにした。その後数度の校正を経て、報告書を刊行した。

基本土層

調査区南側で基本土層を調査した。基本的に表土の下は大戸川の氾濫によって堆積した層である。Ⅲ層は洪水により運ばれた川砂・土が厚く堆積している。表土は10cm前後である。



- | | |
|----------|-------------------------------|
| Ⅰ層 表土 | 黒色腐植土。川砂・砂利が混じる。しまりなし。 |
| Ⅱ層 褐灰色土 | 砂利・川砂が多い。大形の礫も混じる。しまりなし。 |
| Ⅲ層 灰黄褐色土 | 川砂・土が固まった層。若干粘土も混じる。良くしまる。 |
| Ⅳ層 褐灰色土 | Ⅱ層とほぼ同じだが、大形礫が多い。しまりなし。 |
| Ⅴ層 黒褐色土 | 多量の大形礫と砂利が混じる。黒色土がやや多い。しまりなし。 |
| VI層 黑褐色土 | Ⅴ層とほぼ同じだが、大形礫が多い。しまりなし。 |

第2図 酒野谷原塚 基本土層図

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境（第3・4図）

酒野谷原塚の所在する鹿沼市は、東に県都宇都宮市、西は佐野市、南には壬生町・栃木市、北は日光市と接する県中央部に位置する。地形的には関東平野の北縁の一帯である足尾山地の北東部にあたる。市域の約7割が山間部であり、市域の西部は標高300m以上の起伏に富む足尾山地と、その東麓には標高200～300mの鹿沼丘陵が連続しており、中央部から東部は台地が広がる。

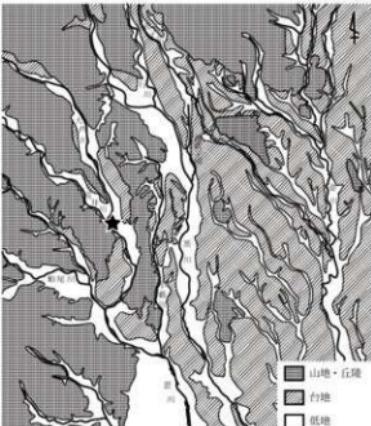
足尾山地からは南東方向に平行して行川・黒川・大芦川・荒井川・南摩川・栗野川・粕尾川・永野川が流れ、これによって山間部では開析谷を、市域の中央部・南東部には低地を形成している。市域の東部は鹿沼台地と称され、台地の各所に見られる湧水を水源として、発達した小河川によって樹枝状に開析された中小の谷が形成されている。

遺跡の所在する酒野谷は、西側を足尾山地の東縁高島屋山に、東側を分離丘陵である酒野谷丘陵に挟まれた、大芦川が形成した谷底平野に位置する。大芦川は足尾山地の最高峰である夕日岳の北西麓から東大芦川として流れだし、古峰ヶ原で支流と合流した後、南東方向に流れ調査地点の直近北側で荒井川、やや下流で南摩川を併せ思川に合流する。

大芦川の形成した谷底平野は、酒野谷原塚から北に大芦川に沿って約6kmの上流の下沢付近まで、南は約5km下流の思川との合流地点の北半田・佐目まで広がっており、鹿沼地域では黒川流域に次ぐ広い低地を形成し、水田地帯を形成している。現在、酒野谷地区には水田が一面に広がっているが、微視的にみると酒野谷の帶状の低地と微高地が南北に幾筋も確認できる。近世においても大芦川は度々氾濫を起こし流路を変えており、谷底平野に南北に延びる低地が旧大芦川の流路の痕跡と考えられる。地区的中央部から東部には、小規模な段丘が大芦川に平行して数段存在している。中・近世以来の集落は、度々起こる大芦川の洪水被害を避けるために、地区的中央部に南北に帶状に延びる高位の段丘面に立地している。このような環境のもと、調査地点は大芦川の左岸の微高地に位置している。



第3図 酒野谷原塚 位置図



第4図 鹿沼市周辺の地形図

第2節 歴史的環境

本節では、鹿沼市域の塚を中心に記述するが、若干酒野谷周辺の戦国期から江戸時代について述べる。

鹿沼市の中心市街地には壬生氏の拠点鹿沼城（31）があり、戦国時代には城下町が成立していた。城下町の範囲は東西2km、南北4kmの範囲で、南北に街道が貫き、居館（御殿）北東に今宮神社（30）、東に家臣の集住地内宿、宿場町の田宿（後の田町）、商工業者の集住地が黒川までの間に展開していた。鹿沼城の北側には押原御所（36）が位置し、鹿沼市内の日光山領の管理や、日光山の社僧の活動拠点となっていた。城下町の南、現在は県道15号鹿沼足尾線と合流する地点に中世以来の宿場である大門宿（24）がある。

徳川家康の死後、東照宮が造営され、江戸と日光を結ぶ街道や宿場（榎木（17）・奈佐原（18）・鹿沼）が整備され、鹿沼は日光例幣使街道と日光道中壬生通りが接続する交通の要衝として重要性を増していく。

塚の位置する鹿沼市街地の西側、大芦川流域の戦国期には加園城（5）・滝尾山城（11）が地域の政治的・軍事的拠点であった。これらの拠点の枝城として、独鉛山城（7）・諏訪山城（15）が周囲を見渡せる山頂に築城している。また、土壘と堀を有する在地土豪の城館が、江戸時代に複数の村に分割される以前の地域単位である各郷に1つの割合で、約2kmの間隔を置いて分布している（ホンノウチ（2）・打出（3）・日向城（8）・堀之内（9）など）。これらの城館は、地域の主要街道沿いの交通の要衝を選んで築かれている。

（1）酒野谷の歴史

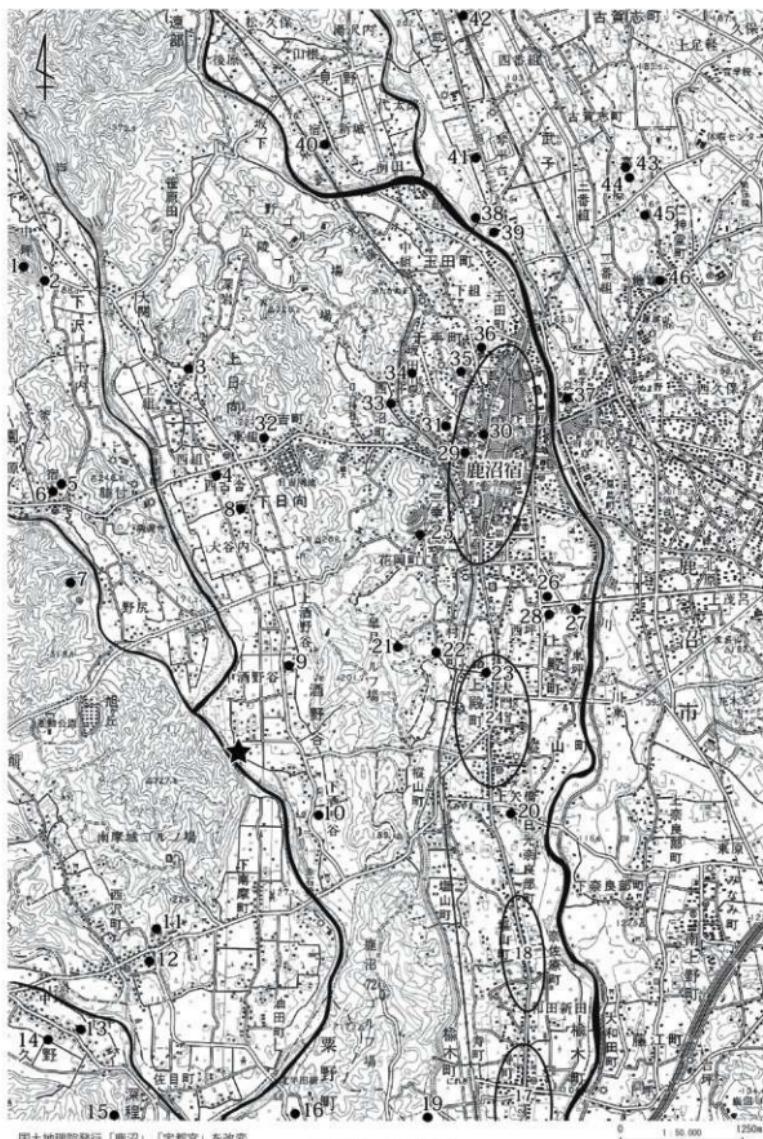
酒野谷初見史料は、永正18年（1521）年芳賀高孝寺領寄進状に「酒谷郷之内東音寺」とあり、中世後半には酒谷郷として確認できる。戦国期には壬生氏の支配下に入り、壬生氏滅亡後の戦国末期には結城氏の所領となった。結城氏の支配下で行われた文禄3年（1594）の検地帳「下野国落合庄酒野谷郷検地帳」が現存している。現在の酒野谷地区は水田が大半を占める地域だが、宝永5年（1708）の鹿沼藩内田氏支配時代に行われた検地では、畠と水田がほぼ同じ割合であり、水田の収穫量も低かったことが分かる。江戸時代前半には、酒野谷村は上・下村に分割され、上酒野谷村は旗本領に、下酒野谷村は天領となる。明治22年町村制施行に伴い、東大芦村に合併され、明治29年に鹿沼町に編入された。

酒野谷では現在も中世以来の伝統を引く家々による杉本稻荷神社の宮座が現在も行われている。また、栃木県では数少ない両墓制が現在でも行われており、埋める墓と、お詣りする墓が別々で、埋める墓をウメバカ、お詣りする墓をシキバカと呼んでいる。ウメバカは家の近くの日当たりのよい場所に作られるが、シキバカは、家から離れた条件の良くない大芦川河川敷などに作られている。

（2）鹿沼市内の塚（第5図、第1・2表）

鹿沼市域で現在確認されている塚は84基であるが、塚の多くは開発で消滅したものが多いと考える。現存する塚は、鹿沼市の南東部及び北東部に多く、ついで大芦川・思川流域が多い。塚の特徴として、単独に存在する塚が大芦川・思川中流域などの低地に多く、丘陵部・台地状では直線的又は群集する塚群が多い傾向がある。

第5図の範囲では、黒川以東の台地上に存在する塚は直線的に並ぶもの（高谷後塚群2基（43）・木曾台塚4基（42）・群集する塚（丸山台塚群5基（38）・上上野塚群6基（39））が多い。現在単独で存在する武子原塚（45）も、近接する位置に塚が存在していることから、かつては群集又は直線的に並んでいたと考える。それに対して黒川以西では、単独で存在するものが大半であり、台地上や丘陵上（酒野谷下山塚（10）・日吉大日塚（32）・大門宿古墳（23）・三幸滝ノ沢塚（25））、河川の合流点（蓼沼塚（13）・久保後塚（14）・桑ノ木塚（16））や河川沿い（酒野谷原塚（★9）・塚越塚（33））に構築する特徴がある。ただ、鹿沼丘陵斜面に位置する兎沢塚群（21）は直線的に3基が並ぶ。



第5図 周辺の遺跡

第1表 酒野谷原塚 周辺遺跡一覧表

番号	種別	遺跡名	所在地	立地	流域	時期	備考
★	塚	酒野谷原塚	酒野谷	沖積低高地	大芦川左岸	近世	令和元年調査、本報告
1	城館	下沢城	下沢	山頂(山櫓)	大芦川右岸	中世	堀・土塁残存
2	城館	ホシノウチ	下沢	山麓	大芦川右岸	中世～近世	土塁・堀の一部残存、裏山に下沢城
3	城館	打出	上日向	段丘上	大芦川左岸	中世～近世	地図団から方形の居館・土塁の痕跡確認
4	城館	十次郎内	上日向	段丘	大芦川左岸	中世～近世	地図団から台形の区画・堀の痕跡確認
5	城館	加園城跡	加園	山地・山麓	荒井川左岸	中世	城主は渡辺氏、龍ヶ谷の山頂を主郭とする
6	陣屋	加園陣屋	加園	台地	荒井川左岸	近世	鹿沼藩内田氏・吹上藩有馬氏の出張陣屋
7	城館	独鈷山城	加園	山頂(山櫓)	荒井川右岸	中世	平成6年調査、堀・土塁・掘立柱建物検出
8	城館	日向城跡	下日向	沖積台地	大芦川左岸	中世	横手氏の居館、一部堀跡・土塁残存
9	城館	堀ノ内	酒野谷	段丘	大芦川左岸	中世	大門氏の居館
10	塚	酒野谷下山塚	酒野谷	丘陵	大芦川左岸	近世	径7.5×2.5m、酒野谷古墳群の最南端
11	城館	淹尾山城(下南摩城)	西沢町	山地・山麓	南摩川左岸 大芦川右岸	中世	南摩氏の居城、山頂部と山麓部に築かれる
12	城館	竹ノ内	西沢町	山麓	南摩川左岸	中世	方200mの居館、淹尾山城と密接に関連
13	塚	藤沼塚	久野	沖積低地	恩川右岸	近世	径約9m・高さ約2m、消滅
14	塚	久保後塚	久野	沖積低地	恩川右岸	近世	径約9m・高さ約2m、消滅
15	城館	諫訪山城	深沢	山頂(山櫓)	恩川右岸	中世	平成5年栗野町調査、堀・掘立柱建物検出
16	塚	桑ノ木塚	北半田	沖積低地	大芦川右岸	近世	径約8m・高さ約1.5m、消滅
17	宿	椎木宿	木戸町	台地	黒川右岸	近世	日光道中壬生通の宿
18	宿	奈佐原宿	奈佐原町	台地	黒川右岸	近世	日光道中壬生通の宿
19	城館	糸山城跡	穂町	丘陵頂部	小牧川右岸	中世	開墾で堀跡・土塁が明瞭ではない
20	城館	久根ノ内	日光奈良部町	台地	黒川右岸	中世	地図団から判明、構造は確認できず
21	塚	鬼塚原群	村井町	丘陵	小牧川右岸	近世	現存5基、南北に並ぶ
22	城館	村井城	村井町	段丘先端	小牧川右岸	中世	大門氏の居館、堀・土塁の一部残存
23	塚	大門宿古墳	上殿町	沖積台地	小牧川左岸	近世?	径10m×高さ3m、カワラケ出土
24	宿	大門宿	上殿町	沖積台地	小牧川左岸	中世～近世	大門氏の拠点、中世以来の宿
25	塚	三幸庵・沢駅	三幸町	丘陵	小牧川右岸	近世	径約4m×高さ約1.5m
26	集落	宝龍内遺跡	上殿町	台地	黒川左岸	縄文～近世	土製仏像・三輪杵・カララケ・内耳土器出土
27	集落	竪電遺跡	上殿町	台地	黒川左岸	縄文～近世	陶磁器・内耳土器
28	集落	明神前遺跡	上殿町	台地	黒川左岸	縄文～近世	陶磁器・内耳土器
29	城館	御殿跡	今宮町	台地	小牧川左岸	中世～近世	壬生御殿の居館の伝承あり、徳川4代将軍家綱の日光二荒神を現在地に移した
30	神社	今宮神社	今宮町	台地	小牧川左岸	中世～近世	御所の森の日光二荒神を現在地に移した
31	城館	鹿沼城	今宮町	丘陵	小牧川左岸	中世～近世	平成12年鹿沼市教育委員会調査
32	塚	日吉大日影塚	日吉町	丘陵	大芦川左岸	近世	通称たゆう塚、径約7m・高さ約0.5m
33	塚	塚越塚	西荒沼町	丘陵	小牧川左岸	近世	径6m×高さ約4m、遺存状態よい
34	城館	坂田山城	坂田山	丘陵	小牧川左岸	中世	壬生御殿の周囲の居館?
35	城館	千手山城	千手町	丘陵	小牧川左岸 黒川右岸	中世	千手山公園内、城館の伝承なし、塚跡残存
36	城館	押原御所	泉町	台地	黒川右岸	中世～近世	日光山僧の里坊・壬生御重の御所
37	城館	府所城跡	下武子町	台地	黒川左岸	中世	鹿沼城の支城、消滅
38	塚	丸山台群塚	富岡町	台地	黒川左岸	近世	現存5基、上上野塚群と同一塚群か
39	塚	上上野塚	御成橋町2丁目	台地	黒川左岸	近世	現存6基、丸山台群とは同一塚群か
40	城館	新城	見野	沖積低地	黒川右岸	中世～近世	土塁・堀が残る、城館でない可能性もある
41	一里塚	八幡台一里塚	富岡町	台地	黒川左岸	近世	道の東側の塚は消滅、江戸より28里目
42	塚	木曾台塚群	武子	台地	黒川左岸	近世	現存4基で構成
43	塚	高谷後塚群	高谷	台地	武子川左岸	近世	現存2基、高谷館内にある
44	城館	高谷城跡	高谷	台地	武子川左岸	中世～近世	堀・土塁が残存、近世の屋敷の可能性あり
45	塚	武子原塚	武子	台地	武子川左岸	近世	径約6m・高さ約2.5m、消滅
46	塚	結城東道塚群	武子	台地	武子川右岸	近世	2基で形成、平成2年調査、消滅

(3) 鹿沼市内で発掘調査された塚

鹿沼市内では8ヶ所（本報告の酒野谷原塚以外）で調査が行われている。時期は、南赤塚の皇宮前塚が中世前半に遡る可能性がある以外は、江戸時代に構築されたものと考える。

・結城道東1号・2号塚（第5図、第1表・46）

鹿沼市街の北東部武子に位置する。平成2年の調査では塚2基が南北に並んで検出した。両塚とも径約5.0m、高さが0.5～0.8mの小形の塚で、盛土中から寛永通寶が出土している。遺物から江戸時代に構築。

・大門宿古墳（第5図、第1表・23）

鹿沼市街地の南部、上殿町に位置する。現況では一辺12m、高さ3.1mの方形で、古墳の可能性も考えられたが、調査の結果塚の可能性が濃厚になった。かつて、塚からは土師質土器、絆石の出土が伝えられている。

・八幡塚（第5図外、第2表・33）

鹿沼市の南東部、上石川に位置する。昭和59から62年の鹿沼流通団地の調査で、塚1基が検出している。調査前まで塚頂部に小祠があり、戦国末期に帰農した石川氏の子孫が祭祀を続けていた。規模は径12.50×高さ1.35mで、南北両側裾部に台形状の平担な張り出しを持つ。塚の南西約3.0mからは長径1.35、短径1.10m範囲で礫群を検出、その中から粉碎された五輪塔破片が出土している。塚頂部からは土師質土器・寛永通寶・永楽通寶が出土しており、出土遺物から、塚の構築時期は、江戸時代前半と推定される。

・稲荷塚1号墳（第5図外、第2表・40）

鹿沼市の南東部、下石川に位置する。昭和58～59年の調査で、径約24mの古墳時代の円墳の墳頂部から配石遺構が検出した。墳頂部に20cm弱の礫を南北に長い長方形状に配石し、その中から、土師質土器・寛永通寶が出土。出土遺物から構築時期は江戸時代前半と推定される。

・町田塚群（第5図外、第2表・28）

鹿沼市の東端、松原町1丁目に位置する。昭和50年に調査が行われ、円形の塚10基が検出されたが詳細は不明である。このうち9基は径5m前後であるが、8号塚のみ径約10mの規模を有する。塚は直線的に並ぶ。

・皇宮前塚（第5図外、第2表・51）

鹿沼市の南部、赤塚町に位置する。平成19年に調査で南北5.0、東西4.8m、高さ1.53m、平面形は方形である。塚の表土中からは13世紀代の中世瓦が出土している。調査区からは13世紀代の溝が検出したことから、中世の前半に構築された可能性が指摘されている。

・山神塚（第5図外、第2表・33）

鹿沼市の南東、上石川に位置する。平成29年の調査で、径7.60m、高さ0.7m、であることが判明した。調査前には、地主により氏神様が祀られており、塚の南側には桜の大木がそびえ立っていた。出土遺物が少なく時期は特定出来ないが、報告者は江戸時代に構築されたものと推定している。

・牧場遺跡（第5図外、第2表・46）

旧栗野町北半田に位置する。平成4年の調査で、南北に並ぶ塚2基が検出している。径は8.0m前後で、高さが1.0m、盛土はロームと黒色土の版築である。構築時期は江戸時代の可能性が高い。

(4) 鹿沼市内の古文書に記された塚

現在鹿沼市史等で公にされている公的・個人所有の古文書に塚の記載があるものが13点ある。その特徴は境界争いに関する古文書にのみ登場することである。以下では古い時期からその概要を記述する。

1 寛永21(1644)年 石川村と上田村の野境をめぐる裁許状

石川村と上田村の野境論争で、村の境界にまね（=土盛り）をすることを宇都宮藩の裁許状で命じている。

第2表 鹿沼市内の塚分布表

番号	岡版	遺跡名	平面	配置	位置		所在地	立地	流域	時期	備考
					堤	道	川	池			
1	★	酒野谷原塚	長方	—		●	合	酒野谷	沖積低地	大芦川	近世 令和元年調査、本報告
2	10	酒野谷古山塚	円	—		古	酒野谷	丘陵	大芦川	近世 径2.5m、高さ2.5m、酒野谷古墳群の南端	
3	13	藤沼塚	円	—	●	●	合	久野	沖積低地	思川	近世 径約9.0m、高さ約2.0m、消滅
4	14	久保後塚	円	—	●	●	合	久野	沖積低地	思川	近世 径約9.0m、高さ約2.0m、消滅
5	16	桑ノ木塚	円	—				北半田	沖積低地	大芦川	近世 径約8.0m、高さ約1.5m、消滅
6	21	兎沢塚群	円	並	●			村井町	丘陵	小藪川	近世 5基、南北に並ぶ
7	23	大門宿古墳	方	—	●	●		上殿町	沖積台地	小藪川	近世 径10.0m、高さ3.0m、土師質土器出土
8	25	三幸塚ノ沢塚	円	—		古	三幸町	丘陵	小藪川	近世 径約4.0m、高さ約1.5m	
9	32	日吉大日影塚	円	—		墓	日吉町	丘陵	大芦川	近世 通称たゆう塚、径約7.0m、高さ約0.5m	
10	33	塚越塚	円	—		●		西鹿沼	丘陵	小藪川	近世 径6.0m、高さ約4.0m、遺存状態よい
11	38	丸山台塚群	円	群	●	●	●	合	富岡町	台地	黒川 近世 5基、上上野塚群と同一塚群か
12	39	上上野塚	円	群	●	●	●	合	御成橋	台地	黒川 近世 6基、丸山台塚群とは同一塚群か
13	41	八幡台一里塚	円	—				富岡	台地	黒川 近世 道の東側の塚は消滅。江戸より28里目	
14	42	木曽古塚群	円	群		●		武子	台地	黒川 近世 4基で構成	
15	43	高谷後塚群	円	並	●			高谷	台地	武子川 近世 2基、高谷船内にある。	
16	45	武子原塚	円	—		●		武子	台地	武子川 近世 径約6.0m、高さ約2.5m、消滅	
17	46	結城東道塚群	円	並	●			武子	台地	武子川 近世 2基で形成、平成2年調査、消滅	
18	鹿	羽賀塚経塚	円	—				墓	板荷	沖積台地	黒川 近世 径4.0m、高さ1.5m 墓地内
19	沼	板荷應ノ塚	円	—				墓	板荷	沖積台地	黒川 近世 径4.0m、高さ0.8m 墓地内
20	北	板荷西久保塚	円	—				墓	板荷	沖積台地	黒川 近世 径9.0m、高さ1.5m
21		板荷岩下塚	不明	—	●			板荷	汨瀬平野	黒川 中世 不明・五輪塔出土	
23		富岡宮道上塚	円	—				富岡	台地	行川 近世 径4.0m、高さ1.0m	
24	鹿	雨溜塚群	円	並	●			富岡	台地	行川 近世 5基、径5.0~9.0m、高さ1m前後	
25	沼	柳屋向原塚群	円	並	●			柳屋	台地	赤川支流 近世 2基、最大塚径17.0m、高さ2.0m	
26	北	大光寺塚群	円	並	●			柳屋	台地	赤川支流 近世 2基、径7.0m、高さ0.8~1.5m	
27		柳屋石神塚群	円	並	●			柳屋	台地	赤川 近世 2基(P11基消滅) 径5~7.0m、高さ1.5m	
28		田山塚群	円	直				松原	台地	安田川支流 近世 10基全て消滅、最大9.4m、高さ不明	
29		芝之内塚群	円	直	●	●		茂呂	台地	安田川支流 近世 8基中5基消滅、最大9.6m、高さ1.5m	
30		山之内塚群	円	直	●	●		白桑田	台地	安田川支流 近世 4基、径2~4m、高さ1m前後	
31		寺内塚	円	—	●		寺	上石川	台地	極瀬川 近世 径6.0m、高さ2.5m、寺院境内	
32		三田市塚	長方	—	●			上石川	台地	極瀬川 近世 東西4.0m、南北1.5m、高さ1.0m、消滅	
33		山神塚	円	—	●			上石川	台地	安田川支流 近世 平成29年県調査、径7.6m、高さ0.8m	
34		八幡塚	円	—				居	上石川	台地 安田川支流 近世 熊調查、径12.5m、高さ1.35m、消滅	
35	東	ドウジン塚	不明	—	●	●		上石川	台地	安田川支流 近世 消滅、規模不明	
36		愛宕塚	円	—				古	上石川	台地 安田川支流 近世 径20m、高さ5mの円墳を再利用	
37		サクラ塚	不明	—	●	●		上石川	台地	安田川支流 近世 消滅、規模不明	
38		鳥喰前塚	円	—	●	●		下石川	台地	安田川支流 近世 径5.5m、高さ1.0m	
39		下石川前塚	円	—	●	●		下石川	台地	安田川支流 近世 径10.0m、高さ2.0m、寺社境内	
40		福荷塚1号塚	円	—		古	下石川	台地	安田川支流 近世 径22.0m、高さ2.4m、古墳を再利用		
41		大延塚	長方	—	●			草久	汨瀬平野	大芦川 近世 東西約1.0m、南北約20m、高さ1m	
42		上北ノ内塚	円	—				久野	沖積平野	思川 近世 径3.0m、高さ1.0m、消滅	
43	鹿	辰ノ頭塚	不明	—	●			深程	丘陵	思川 近世 消滅、規模不明	
44	沼	辰ノ尾塚	円	—				北半田	汨瀬平野	思川 近世 径9.0m、高さ1.0m、消滅	
45	西	跋塚	円	—				北半田	汨瀬平野	思川 近世 径1.5m、高さ2.3m、消滅	
46		牧場遺跡	円	並	●			北半田	丘陵	思川 近世 2基(消滅)	
47		中栗野板名塚	長方	—	●			中栗野	沖積台地	栗野川 中世 東西6.0m、南北13.0m、高さ2.0m	
48		六万塚	円	—	●	●		柏木	沖積平野	思川 中世 径5.0m、高さ2.0m、消滅	
49	南	土ヶ塚塚	長方	—	●	●		神	野沢	丘陵 思川 近世 東西10.0m、南北7.0m、高さ1.2m	
50	部	北赤塚一里塚	円	—				北赤塚	台地	思川 近世 道の東側の塚は消滅。江戸より25里目	
51		皇宮前塚	方	—			寺	北赤塚	台地	黒川 中世 東西5.0m、南北4.8m、高さ1.0m、消滅	

直：直線的な配線
並：並立するが直線的ではない
群：規則的に並ばず、密集する

境：旧町村域に位置する
道：(日光)主な通りなど
河：生活道路の交差点に位置
川：河川の沿岸、又は近接している

合：河川の合流地点に近接
古：古墳群内に位置する
寺：寺院境内に位置する
神：神社境内に位置する
居：居館・城郭内に位置する

第3表 塚記載古文書一覧

※文書番号は本文の番号と一致する

No.	文書発給年	地域	町・村名	種別	古文書内容	所蔵者	引用文献
1	寛永21(1644)	南東部	石川・上田	境塚	石川村と上田村の野庭めぐる裁許状	川田家	鹿:近2・235
2	寛文12(1672)	南東部	池之森周辺八ヶ村	境塚	宇都宮領と壬生領にまたがる林場入会地の境界決定	高橋家	鹿:近2・267
3	寛文12(1672)	南部	榎木・塩山	境塚	榎木町と塩山村の山・原境をめぐる訴訟	佐藤家	鹿:近2・335
4	寛文13(1673)	南部	池之森・亀和田	境塚	宇都宮領と壬生領にまたがる入会地の境界決定	益子家	鹿:近2・406
5	延宝5(1677)	南東部	茂呂	境塚	茂呂村の入会をめぐり論争となる	市田家	鹿:近2・233
6	天明3(1683)	北東部	鹿沼・茂呂・千渡	境塚 供養塚	鹿沼町が野庭開発をめぐり茂呂・千渡村を評定所に訴訟	市田家	鹿:近2・235
7	元禄5(1698)	南部	亀和田・赤塚 羽生田	境塚	亀和田・赤塚村が羽生田村の百姓林を入会真跡場にするよう領主に訴える	益子家	鹿:近1・407
8	元禄6(1693)	南部	榎木・塩山	境塚	榎木町と塩山村の山・原境をめぐる訴訟	田中家	鹿:近2・357
9	元禄15(1702)	西部	日向・野尻 酒野谷	境塚	日向村と野尻村との川除出入訴訟	川田家	鹿:近2・230
10	元禄15(1702)	西部	日向・野尻	境塚	日向村と野尻村との境塚の由来	川田家	鹿:近1・231
11	宝永2(1705)	南東部	池之森周辺六ヶ村	境塚	池之森村他六ヶ村と中泉村との野庭論争	高橋家	鹿:近2・272
12	享保12(1727)	南東部	池之森・藤江 大和田・上野村	境塚 ひしり 塚	池之森村・藤江・大和田・上野村による合子沢・細沢・三町野の野庭をめぐる論争	高橋家	鹿:276・277・278・279・280
13	慶応3(1867)	南部	村井村	境塚	村井村百姓が村内の林場を分割する議定書	脚方神社	鹿:近1・297

鹿:近1・(文書番号) 鹿沼市史編さん委員会2000『鹿沼市史 資料編―近世1―』鹿沼市
 鹿:近2・(文章番号) 鹿沼市史編さん委員会2002『鹿沼市史 資料編―近世2―』鹿沼市

2 寛文12(1672)年 宇都宮領と壬生領にまたがる林場入会地の境界決定の裁許状

宇都宮藩領の池之森村と壬生領の七ヶ村との間に林場入会に関する争論が起こり、新しく境界を設定し、それぞれの村の境界に、新たに境塚を構築するよう裁許状が出される。

3 寛文12(1672)年 榎木町と塩山村の山・原境をめぐる訴訟

榎木町と塩山村で山原(鹿沼丘陵) 境論争となり、前年4月に幕府役人の見分を経て確定した境界が、再度論争となつた。榎木町側は境界を超えて塩山村が境塚を構築していると訴えている。

4 寛文13(1673)年 宇都宮領と壬生領にまたがる入会地の境界決定

亀和田村が利用する壬生領・宇都宮領にまたがる入会林場に境界を定める文書。その中で、池之森村・藤江村・羽生田村三村の境に境塚があつたことがわかる。

5 延宝5(1677)年 茂呂村の入会をめぐり論争となる

村で入会として利用されていた場所を開発し争論となつた。その際に境として境塚が目印となっている。

6 天明3(1683)年 鹿沼町が野庭の開発をめぐり茂呂・千渡村を評定所に訴訟する。

鹿沼町と茂呂村・千渡村との境界部分である山野をめぐり論争となる。訴訟の内容は、境界部分にある山野は、寛永15年幕府の検使により鹿沼町の領分とされたが、林などの採集は三ヶ村の入会とされた。しかし、先年より茂呂村等による烟の開発が境を超えて行われたことから、天明2年に鹿沼側が境界に多数の塚を構築した。その内の2基は供養塚と呼ばれていたこと、その供養塚2基が茂呂村により壊されたことがわかる。

7 元禄5(1698)年 亀和田・赤塚村が羽生田村の百姓林を入会林場にするよう領主に訴える

赤塚村と亀和田村が林場入会としてきた羽生田村の北原・東原地には、15年前から壬生藩御林が設定され、赤塚村や亀和田村が利用できる林場との境に境塚を築いたことがわかる。

8 元禄6(1693)年 榎木町と塩山村の山・原境をめぐる訴訟

榎木町と塩山村との境では、新たな開発が進められた為、山原野の境をめぐり論争となつた。この論争の

裁許状の中で、新たに確定した塙山村と榎木町の境（丘陵部）に境塙を築くことが命じられている。

9 元禄 15 (1702) 年 日向村と野尻村との川除出入訴訟

日向村が自村を水害から守る為、野尻村が建設した堤を破壊した訴訟の中で、酒野谷と日向村・野尻村の三ヶ村の境界に境塙があり、その東には酒野谷と日向村との境塙が存在した。

10 元禄 15 (1702) 年 日向村と野尻村との境界塙の由来

日向村と野尻村の境塙について、野尻村の者が、日向村との境界際に新屋敷立て、日向村方へ耕地を拡張し論争となつた。その為、日向村と新屋敷を建てた者が仲介者を介して、元禄 15 年から 60 年ほど前に境塙を築いたと述べている。

11 宝永 2 (1705) 年 池之森村・他六ヶ村と中泉村との野境争論

池ノ森村とその他六ヶ村が、中泉村との間で野境争論が起こる。この中で、上野村・石川村・池野森村の三ヶ村の境界に境塙があることが記述されている。

12 享保 12 (1727) 年 池之森村・藤江・大和田・上野村による合子沢・細沢・三町野の野境をめぐる論争

池ノ森村と藤江・大和田・上野村で合子沢、細沢、山町野の野境をめぐる争いである。これら四ヶ村は寛文 5 年 (1665) 年に境界が確定していたが、その際、境塙としてひじり塙が登場する。また、上野村・大和田村・藤江村が池之森村との境界に、新塙を 8 つ以上並べて構築していることがわかる。その他にも、庚申塙も境塙として存在していた。寛文 5 年 (旧暦の 2 月 26 日) には、これらの塙群が、池之森側に 3 度にも亘り壊され、その度に築き直していることが述べられている。また、池之森村、藤江両村の入会林場である舟原地内に物見塙・供養塙・ひじり塙 3 つを境塙として築いている。

13 慶応 3 (1867) 年 村井村百姓が村内の林場を分割する議定書

村井村の旗本伊沢・本田両給の百姓 45 名で林場を分割し境界を定める際に、谷地や水気の多い場所や林場境に当たる場所に小塙を築かないよう取り決めている。

鹿沼市内に残された古文書の中で塙の記載のあるものは、江戸時代以降のものに限られる。それも大半が寛文～元禄期 (1661 ～ 1704) のものである。鹿沼市域で残された古文書を見る限り、塙は 17 世紀後半以降盛んに築かれたことがわかる。大半が境塙であり、各村落の境、特に複数の村落が境界を接する場所に塙が構築されていることが分かる。また、境界争いのある場所では、境界に多数の塙を並べて構築している。また、塙は厳密に両村の境界に構築されるのではなく、両村に紛争が無い場合には、相手側の領域内に塙を築く場合があることがわかる。

18 世紀前半以降は古文書に塙は登場しなくなる。唯一幕末近くに村で入会地を村民間で分割する際に、谷地など水気の多い場所では小塙を禁止した事例が見られるのみである。このことは、江戸時代前期に新田開発が鹿沼市域でも盛んになるが、江戸中期以降の土地開発の停滞に合せて、塙に関する記述が古文書に見られなくなる。江戸末期になり土地の再開発が進むにつれて塙が古文書に僅かに登場する。

鹿沼市内に残された古文書の中で、塙を造る契機は境界争いが全てであるが、古文書からは、①公が介入して塙を造らせる、②村同士の話し合い、③個人と村の話し合いで造る場合があることが分かる。

塙の呼び名については、古文書では大半が境塙としか記されないが、「和尚塙」「供養塙」と名付ける事例もみられる。だが、このような塙も、境界争いでは境塙同様に相手側に何度にも渡って壊されることがある。

以上、古文書から鹿沼市内に存在した塙の概略を記述したが、古文書に記される塙は、現在では失われて確認出来ない。古文書に記述された塙は、当時築かれた塙の一端であると考えられることから、現在残された塙を遙かに上回る数の塙が鹿沼市内の各所に身近に存在していた。

第3章 調査の成果

第1節 遺構

ここでは検出した遺構・土層図について説明する。

(1) 調査前の現況（第6図）

酒野谷原塚は、西側の大芦川に向かって緩く傾斜する河川沿いに構築されている。調査前の塚の標高は、頂部で 139.03m、南西裾部地表面で 137.94m、比高差 1.09m である。現況の規模は、南北 16.5m、東西 8.7m の闊丸長方形を呈していた。また、塚の東側盛土部分は調査前に削平を受けていた。

(2) 参道（第7図、図版3）

塚の南東裾部から塚頂部に向かって幅 0.75 から 0.50m、皿状に窪む参道が 5.2 m 程確認できた（現参道）。また、塚の表土を取り除いた段階で、南裾部から緩く北東に向かってカーブしながら頂部にむかう幅 1.0 m から 0.8m、長さ 5.8m、浅く皿状に窪む参道の痕跡が検出された（旧参道）。旧参道の西際には 0.1 ~ 0.3m 大の川原石を並べ、参道の区画としていた。東側の参道区画は明確ではないが 0.1 ~ 0.2m 大の礫を区画石として用いている。参道に硬化面は確認できなかった。

(3) 石祠の設置位置・神域（第7図、図版4）

参道の突当り、櫻の根株の前面から東西 1.2m、南北 0.8、深さ 0.1m の闊丸方形の掘込みが確認出来た。周辺から祠破片が出土しており、また、地域住民の聞き取りから、この掘込み部分に水天宮が鎮座していたことが分かった。塚頂部からは石列が検出した。範囲は南北 4.95 × 2.2m の長方形で、塚の主軸に対して約 15° 東に傾いている。この傾きは、旧参道とほぼ同じである。この区画に用いられた石は長さが 0.2 m ~ 0.3 m であるが、一部には長さが約 0.5 m、重さが 50kg 以上を超えるものもあり、作業員 2 人でやっと動かせる状態であった。石列で囲まれた範囲内に慎重に約 0.5m 挖り下げたが、遺物は出土しなかった。

(4) 磨敷（第8図、図版3・4）

塚南側を平面的に 0.1 ~ 0.2m 挖り下げた段階で各所より磨敷が検出した。塚北側部分からも磨敷が検出しきたが、平面図を作成する前に遺構が失われてしまった。塚南側の調査では、東西約 8.0m、南北約 8.0m の範囲で磨敷を検出した。石敷は標高 138.0 ~ 138.2m の範囲内で確認されている。磨敷は塚の南西部、セクションライン D-D' の手前約 0.2m で、東側に屈曲して調査区外まで伸びている。セクションライン D-D' の南側からは石敷は検出されなかった。塚の南側では、地山Ⅱ層の上面に 0.05 ~ 0.15m 前後の礫を敷き、裾部には 0.2m 大の礫を外護石状に据えている（部分的には 2 ~ 3 段積まれている）。これは、地山Ⅱ層のしまりがわるく、非常に崩れやすい層の為、礫を敷いて流失・崩れなどを防ぐ目的で敷かれたものと考える。

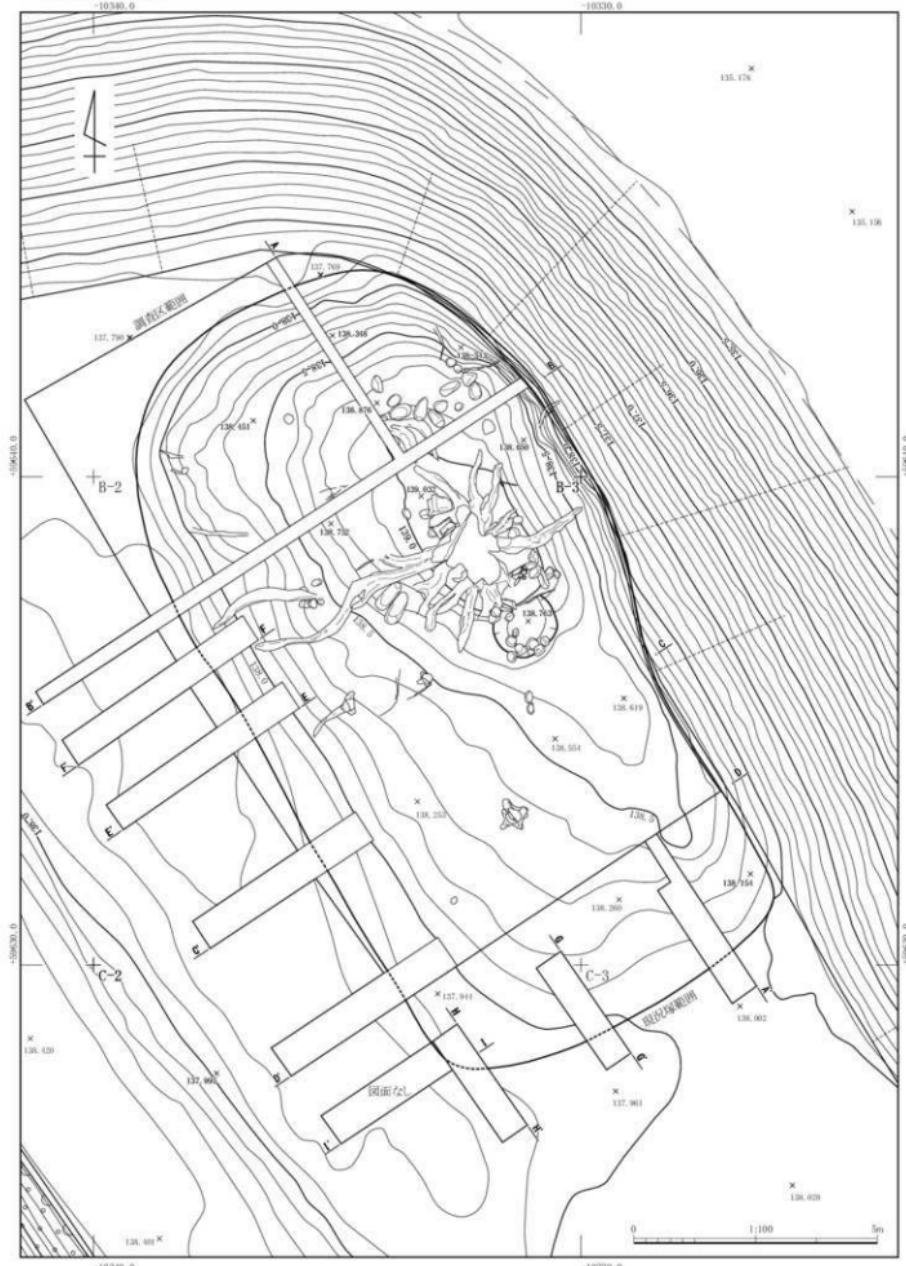
塚北側でも、塚中央部寄りの地山Ⅱ層が確認できる範囲で石敷を検出した。以上から、石敷きは少なくとも南北約 9.8m 前後、東西 8.0 m 以上の範囲に及ぶことが確認出来た。

(5) 塚盛土 A-A'・B-B' 土層図（第9・10図、図版3）

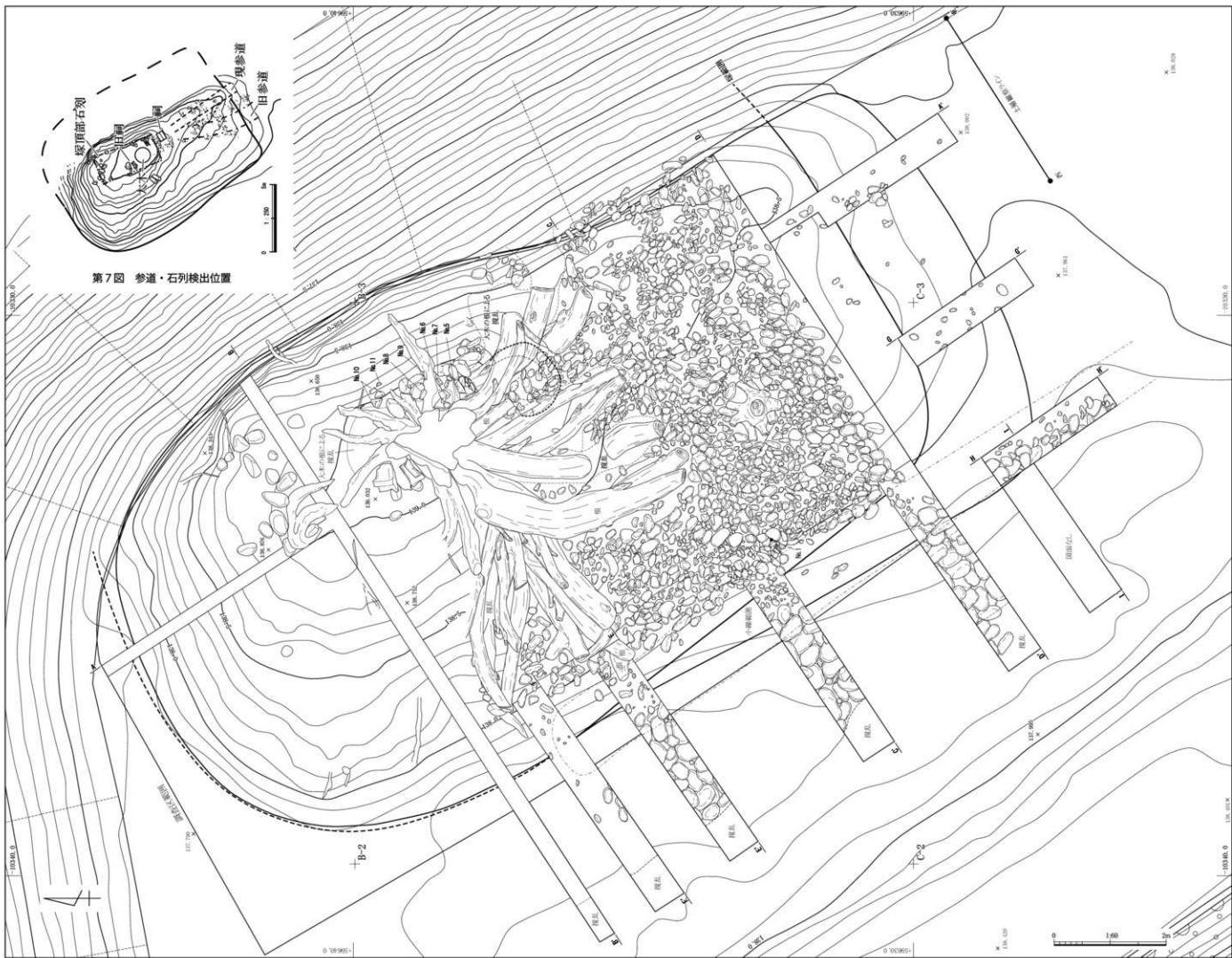
塚中央部の南北 3.3m、東西 9.0m の範囲は根株の為、調査は不可能であった。その為、塚の主軸ラインである A-A' の土層断面図は、南側と北側に別けて作成し、図面上で合成した。また、塚北側と南側では塚の構築の仕方に違いがあり、北側と南側を分けて説明する。

塚北側

塚北側は地山Ⅱ・Ⅲ層を、深さ約 0.3 から 0.5m 挖り込み、地山面を平坦にならしている。塚裾部には 0.2 ~ 0.4 cm 大の礫を数段組んだ石組が検出している。（第2石組・A-A'・B-B' の 11 層）。この石組が塚北側から

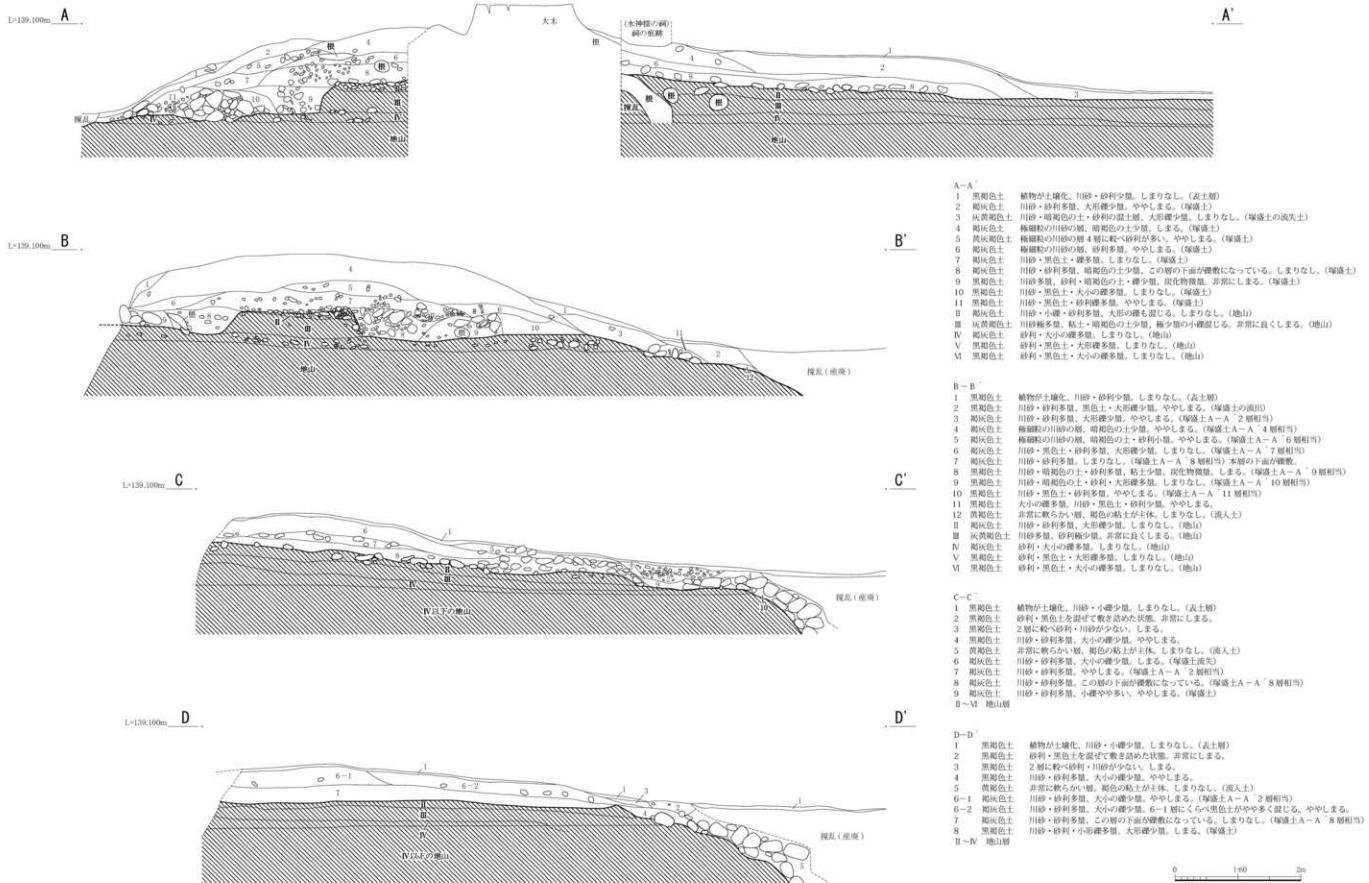


第6図 酒野谷原塚調査区範囲及びトレンチ配置図 (1/100)



第7図 参道・石列検出位置

第8図 酒野谷原塚 遺構平面図 (1/60)



第9図 酒野谷原塚 土壟断面図1 (1/60)

西側の裾部を円弧上に回っており、塚の北辺から西辺の範囲を示すと考える。この石組がどこまで南側に伸びていたかは、塚中央部の大木から延びる根による攪乱で不明である。

塚北裾部から1.0～1.3m内側に、幅1.5m・高さ約0.5m、塚西裾部から2.5m内側に、幅1.0m・高さ0.4mの0.2～0.5cm大の礫を数段組んだ石組が検出している。(第1石組、A-A'・B-B'の9層)。この石組も円弧上に塚北側を回っているが、どこまで南側に延びていたか大木根株の為、確認できなかった。石組1と塚中央部に埋め残された地山(塚北側A-A'・B-B'地山II・III層)の間には、川砂・砂利・褐色土・粘土等で突き固めた幅約1.0m深さ0.5mの9層が確認できた。この層は移植ゴテを中々通さないほど非常に綿まとった層で極微量炭化物も含まれていた。石組の間を埋め戻し平坦にし、その上を川砂・砂利・大小の礫・黒色土を主体とした、しまらない6・7・8層で盛土して後、非常に粒子の細かい川砂を主体とした2・4層で覆っている。

塚南側

南側は、地山面(II層)上面に小礫を敷詰めた後、川砂・砂利・礫を主体とした8層(B-B'の7層)を0.3～0.4m、その上に川砂を主体とした2・4・6層を0.3～0.4mを盛土している。特に塚中央部を覆う4層は非常に粒子の細かい川砂の主体で盛土している。塚範囲外の南側の地山II層は、石敷きがなくなる部分から南側は平坦であり、塚構築に際してこの部分は地山を削平して整形しているものと考える。土層図からは、塚の南側範囲はA-A'の2層端部であり、現況の想定塚範囲より1.8から2.0m内側になる。

C-C'・D-D'土層図(第8図)

基本的に塚南側A-A'と同じで盛土である。塚の西側裾部付近からは、幅1m～1.5m、深さ0.1m～0.2mの砂利と黒色土を突き固めた2層が検出した。その層を取り除くと石組みが検出した。石組は約0.2m～0.5m大の川原石を用いており、大芦川に平行して検出した。セクションポイントのC'・D'から東に約0.3・0.5mの所でピンポールによる深さの確認を行った結果、深さ約1.2～1.5mの所にも石組が存在することが確認出来た。両セクションラインの塚西側裾部付近では、地山III層まで掘り下げ、幅0.5～0.8m平坦面を造成している。また、D-D'セクションラインでは、この平坦面の下に幅0.4～0.7mのやや傾斜する平坦面を造成している。この石組は一部分が確認できたのみであるから、どのような構築方法か不明であるが、0.3～0.4m大(一部には0.5mを超える)の川原石を横積みして、川原石の間には小礫を埋め込み、石組が動かないようしっかりと固定されている。

E-E'・F-F'土層図(第11図)

塚西側裾部で検出した石組の範囲を明確にする為に新たに設定した。両セクションラインからもC-C'・D-D'セクションラインから続く石組及び2段の平坦面が確認出来た。F-F'セクションラインは産廃による攪乱で石組は確認できなかったが、調査中には約0.5m大の石が2点検出した。

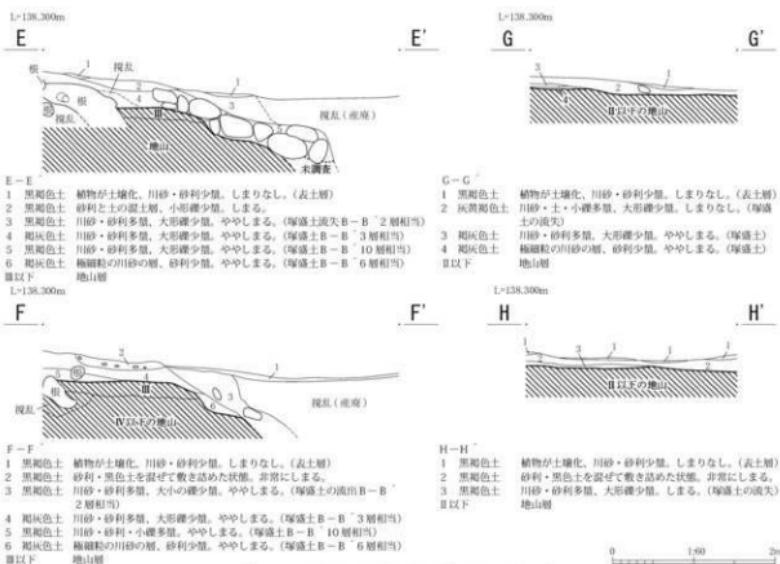
G-G'・H-H'土層図(第11図)

塚の南側範囲を確認する為調査した。塚南限の盛土範囲がG-G'セクションラインの3層までと考えられ、南北の規模が確認できた。



第10図 塚北側石組検出位置図

第3章 調査の成果



第11図 酒野谷原塚 土壌断面図2 (1/60)



B-B' セクション 石組検出状況



C-C' セクション 石組検出状況



I-I' セクション 石組検出状況

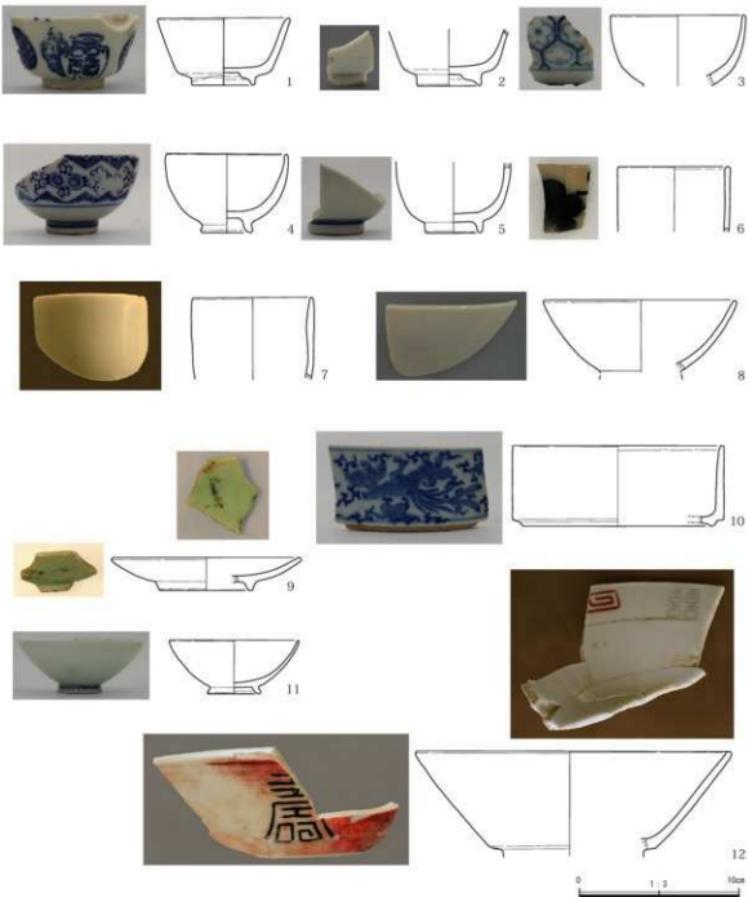


E-E', F-F' セクション

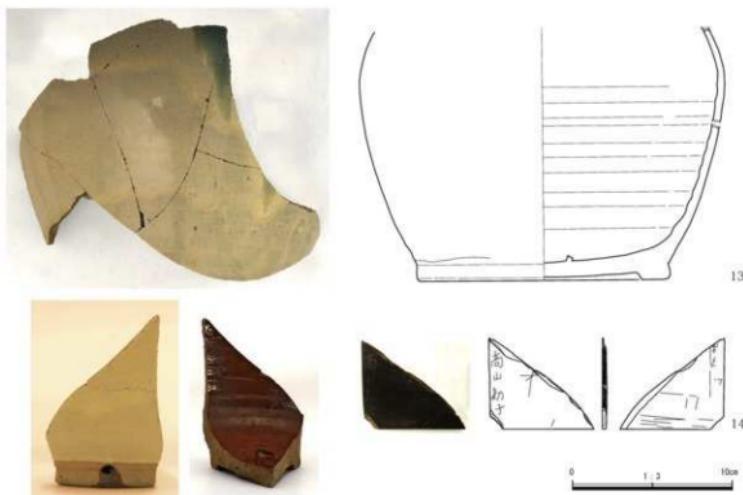
第2節 遺物（第10～12図、第3・4表）

出土遺物は、陶磁器・石製品・石造物である。いずれも酒野谷原塚が築造された後に、廃棄又は塚上に設置されたものである。塚の構築時期を示す遺物は出土していない。

陶磁器の大半が表土からの出土である。年代は昭和の前半代が中心である。 石製品は石板であり、明治期に小学校で使われた筆記具で、塚北側の表土中から出土している。石造物は祠であり、塚中央部の大木（御神木）の切株周辺から出土している。



第12図 出土陶磁器実測図（1）



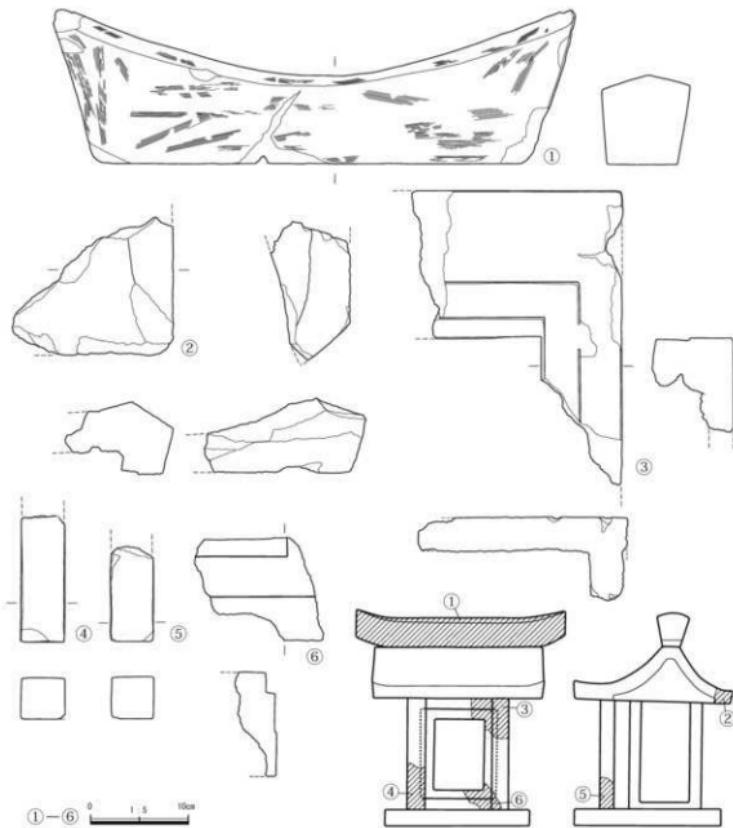
第13図 出土陶磁器実測図（2）石製品実測図

第4表 酒野谷原塚 出土陶磁器観察表

No.	器種	口径	底径	高さ	技法・文様等（内面／外面／底部）	残存	出土地	時期
1	磁器 小瓶	8.0	3.8	4.2	鋼版転写 三足鼎「口」文字・鈍形窓青面 波文・草文・蛇ノ目圓形高台・無輪	口・体2/3 底1/3完存	塚北西部・表土	20世紀第一四半期
2	磁器 小瓶			(3.8)	透明釉・蛇ノ目圓形高台・無輪	底1/2 体一部	塚南西部・表土	20世紀第一四半期
3	磁器 小瓶	(8.0)			ゴム印押 連續亀甲文に梅花文・圓線／圓線	口一部 体1/6	塚北西部・表土	20世紀第一四半期
4	磁器 小瓶	(7.4)	3.0	4.9	ゴム印押 双花文・唐草文・圓瓣状蝶目 文・圓線	口1/5 底1/5	塚北西部・表土	20世紀第一四半期
5	磁器 小瓶			3.3	体部・高台面に圓瓣線・長石軸で底部外 面に文字か	体1/4一部残存 底1/3完存	塚南西部・表土	20世紀第二四半期
6	陶器 長筒形 湯呑	(6.8)			吹釉 濃青灰色釉で梅花弁、蓋は濃いコバ ルト、枝は鉄釉で手書き	口・体1/6	塚西部・表土	20世紀第二四半期
7	磁器 長筒形 湯呑	(7.4)			透明釉	口・体上半2/5	塚西部・表土	20世紀第二四半期
8	磁器 碗	(11.8)			透明釉	口1/4	塚南西部・表土	20世紀第二四半期
9	磁器皿	(10.4)	(5.6)	2.0	クロム青磁 型打ちで連續弧状文／疊付け 無輪	口一部 底1/6	塚西部・表土	20世紀第二四半期
10	磁器 段重身	(12.8)	(11.6)	5.0	ゴム印押 鳳凰・楕・唐草文／口縁部・疊 付け輪剥ぎ	口・体・底1/4	塚西部・表土	20世紀第二四半期
11	磁器 盃	7.8	3.0	3.3	高台輪番文／疊付け輪剥ぎ	口4/5 底完存	塚西部・表土	20世紀第二四半期
12	磁器 中華鉢	(18.6)			上給付けで赤絵を地、黒褐色釉でゴム印押 「壽」／金色圓線・上繪付けで赤絵文、 別な色絵文字は剥離	口1/8 体1/5	塚南西部・表土	20世紀第三四半期
13	陶器盃	(15.2)			灰釉を地に肩部に灰綠釉を重ねず／鉄釉・ 鉄袖、酒器	体一部 底1/8	塚西部・表土	20世紀第一四半期
14	石板			厚0.2	材質粘板岩、針書きで「高山初子」、裏面 にも針書きで「□□高」	一部	塚北側表土	明治期～大正前半

備考

実測したもの以外に、小破片が24点の陶磁器片が出土している。いずれも小破片で、昭和期前半～中半の遺物が中心である。



第14図 石造物(石祠)実測図(1/5)

第5表 酒野谷原塚 出土石製品観察表

No.	種別	残存長	残存幅	残存厚	特徴	残存	出土地	取上No.
1	石造物 石祠	56.2	最大16.5 最小9.0	9.2	鳥居形の屋根。石質は凝灰岩で他の部位の石材に較べ緻密な石材である	ほぼ完存	大木切株南側 表土	No. 5
2	石造物 石祠	16.6	14.2	7.3	切妻造り、流造りの天井部破片	一部残片	大木切株東側 表土	No. 10
3	石造物 石祠	30.1	21.6	9.4	胸部扉部(火袋部)上半、石質は凝灰岩	一部残存	大木切株東側 表土	No. 6
4	石造物 石祠	12.9	4.3	4.5	角柱、天地不明。石質は凝灰岩で胸部の石材に較べ緻密	1/2残存	大木切株東側 表土	No. 7
5	石造物 石祠	9.3	4.35	4.4	角柱、天地不明。石質は凝灰岩で胸部の石材に較べ緻密	1/2残存	大木切株東側 表土	No. 11
6	石造物 石祠	13.3	10.6	4.3	胸部扉部(火袋部)下半。石質は凝灰岩	口・体1/6	大木切株南側 表土	No. 9

備考

実測はしていないが、大木の切株周辺から、角柱の破片3点、胸部大形の破片が2点、小破片が14点出土している。

第4章 総括

第1節 塚の伝承と形状・構築方法（第15図）

1. 伝承

酒野谷原塚は、地元の人達の間では巨大な楕の大木がある水天宮様として知られ、年に一回、酒野谷集落の総鎮守落合神社の神主が祭祀を行い、地元の人々が定期的に塚の清掃を行ってきた。塚構築時期についての伝承・文献ではなく、水難の神様として信仰されてきた。地元の年輩の方々からの聞き取りでは、親の世代（明治時代）には、すでに塚の上には大木が存在しており、塚を壊したら罰が当たると言い伝えられている。

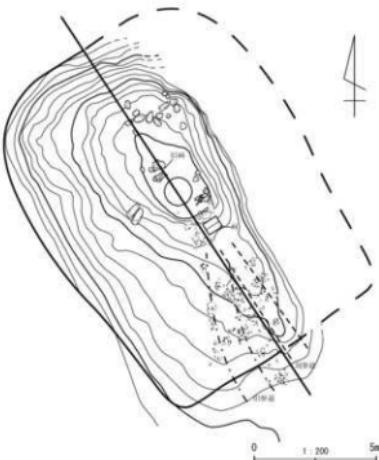
本塚からは、水天宮の祭祀に用いられ、廃棄されたものと考える湯飲み、茶碗類が出土している。基本的に仏に毎日供える茶湯器と同じであり、一部酒器も出土している。また、塚からは水天宮の石祠が新旧2棟分出土している。古い1棟は、大木の根株北側から、新しい祠は大木南側から破片が一部出土している。本報告で実測図を掲載しているのは、塚南側で出土した祠である。

2. 形状

塚盛土の東側は古い時に削平されている為、東西の規模に不明な点も残るが、塚南北のA-A'セクションラインを中心軸とすると（第9・15図）、規模は南北14.8m、東西12.0m前後で平面形は隅丸長方形である。また、現況図を作成した段階で標高138.4mラインが前方後方形状に全周することが判明した。

塚の構築過程として、第1段階では、塚北側は地山を0.4m～0.5m掘り込み、二重の石列を組んでその間を埋め戻し、塚南側は礫を敷いている。第2段階では、南北約13.5m、東西推定約12m範囲に、礫・砂利・川砂交じりのしまりのない層を隅丸長方形に0.2～0.3m盛土している（第9図）。第3段階では、前方後方形状に北側は約東西6.5m、南北7.5m、前方部は前方部幅約2.0～4.0m、南北約5.0m盛土している。特に3段階のA-A'、B-B'4層（第9図）は、粒子の非常に細かい川砂に土を混ぜて叩き始めた状態であった。この4層を構築するのには非常に手間と労力が必要である。また、特異な構築方法として、北側から西側にかけて検出した第1石列・第2石列（第10図）の目的については、大芦川との関係が想定される。

地元の年配の方々からの聞き取りからは、大芦川は度々洪水に見舞われたが、酒野谷地区の堤防が決壊したことはこれまでにないが、越水は度々あったとのことである。越水した場合、大芦川や荒井川の水は塚の北側又は西側から塚周辺に流れこんでくることから、越水などにより塚が侵食され、崩壊しない為の工夫が二重の石組を施行した理由と考える。また、江戸時代の大芦川は、野州思川通り筏通路と呼ばれ、木材を筏組する閑場が塚の北側に存在しており、筏を組んで運ぶ人々に、塚北側周辺の地山を削平することにより、大芦川から塚が大きく見える視覚的な効果も考慮した可能性がある。調査では、現参道の下から旧参道の痕



第15図 酒野谷原塚 復元想定規模

跡が確認でき、この旧参道は大芦川に向かっており、筏流しの従事する人々も水難を避けられるように参拝していた可能性も考慮する必要がある。

第2節 本塚と構築方法が類似する例

管見の限りでは、本塚と同様な構築方法を取る塚は確認出来なかつたが、部分的に類似する例として、以下の数遺跡を紹介する。

1. 碠敷

本塚と類似する例として、新潟県下田村山の下塚は、十嵐川沿岸に構築された塚で、平面隅丸長方形で北西に主軸を持ち、長軸9.0m、短軸7.0m、盛土内に河原石を台形状に長軸8.0m、短軸7.0m、高さ0.5~0.6m敷詰め、側面も石を3~4段並べている。出土遺物も少なく、時期は特定できないが、渡来銭が1点出土しており、中世後半に構築された可能性がある(小林1988)。また、東松山市物見山塚群があり、丘陵尾根上に塚が118基あまり分布しており、その内調査された16号塚は、径4.8mで塚下中央部から

やや北に寄った位置で集石が直径1.5mの範囲で確認されている。19号塚は、東西4.5m、南北3.8m、高さは0.80mで塚南側裾部下から前面にかけて2.5×1.5mの範囲から礎敷を検出している。報告者は、本塚群は江戸期前半に遡る可能性を指摘している(水村1980)。

2. 平面形態

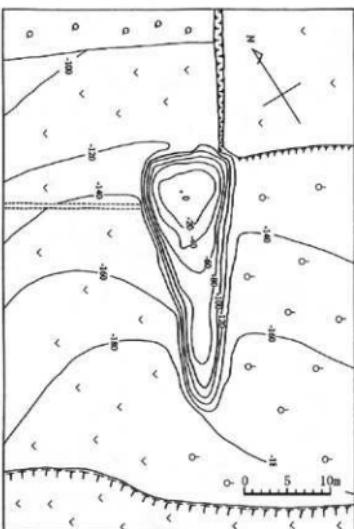
本塚と類似する例として、測量調査が行われた足利市小俣の叶花古墳が挙げられる(第16図)。小俣川が形成する沖積地に位置し、墳丘は低くならかである。全長30.5cm、後円部幅10.8m、高さ1.4m、前方部幅5.0~8.0m、高さ0.8m、ほぼ全面が川原石で覆われている(斎藤1997)。酒野谷原塚の第3段階に盛土された、前方後方形状の盛土部分と類似している。足利市中里阿弥陀前遺跡は、渡良瀬扇状地の沖積微高地に位置する。A遺構は前方後円形状を呈した全長15.6mの低い塚で、砂・粘土で構築し、その上に礎を載せている(前澤1974)。鹿沼流通團地内八幡塚は鹿沼市内の塚分布(第2表)で触れたが、塚の南北に張り出し部も持ち、塚頂部に向かうスロープの役割を果たしている。出土遺物から江戸時代前半の所産である(初山1991)。

以上、本塚に類似する部分を持つ遺構をいくつかを取り上げたが、いずれも構築時期は中世後半から江戸時代前半の範疇と考えられている。

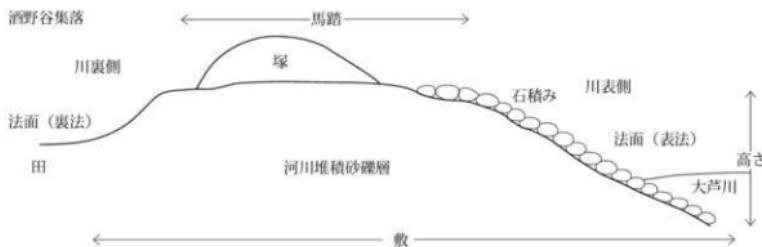
第3節 塚西側で検出した石組について

1. 石組方法

第3章でも遺構の検出状況について説明したが、塚西側からは石組が検出した。土層断面図C-C'(第9図)からは、塚と同時か、あまり時間を置かないで構築されたと考える。石組は確認された部分では、法角度は



第16図 叶花古墳測量図(註1文献から)



第17図 石堤部分名称 及 略横断面模式図

25~30°で0.2~0.4mの大河原石を横積している。隙間に小さな砾を埋め込んでいるのが特徴で、石組みを取り外すことは困難である。調査範囲では裏込めは確認できなかった。石組の高さ、基底部等は不明であるが、石組は大芦川に平行して検出しており、石堤の可能性が高く、栃木県内では最初の調査例となる。その構造は基本土層断面図(第2図)から、周辺を大きく改変して盛土した痕跡ではなく、大芦川沿岸の自然堤防(河川体積砂礫層)を堤本体とし、川表側の法面に石を組んでいるものと考える。裏側については調査前に削平されており、石組が存在したか不明である。この石組は川岸の保護することに重点を置いたもので、護岸施設的な石堤と考える。この様に、土盛をして堤防を築くのではなく、自然地形を利用して堤防・石堤を構築する事例は、大阪府吹田市五反田遺跡の平安前期からみられ、中世以降一般的になる(畠1998)。鎌倉市の横小路周辺遺跡、静岡県磐田市原野谷川輪中堤、山形県米沢市直江石堤、山梨県白根将棋頭など、自然堤防の両側を加工して石を組んでおり、また、石堤の下半又は上部にかけて自然堤防を利用して石堤を構築している。この様な工法で構築された石堤は、中世~江戸時代前半に多く構築されている(畠1998)。

本塚の石積方法は、河原石を横に重ねるように隙間なく積んでおり、一部小口側を表側に向いている。このような石積の類例として、山形県米沢市の直江石堤B類と類似しており、江戸時代前半~中期前半の石積法とされる(手塚2009)。

2. 古文書等からの考察

文禄3年検地帳からは、塚の位置する大芦川の河川沿いは近世初頭から開発が進められている。また、酒野谷原塚の南には、下南摩(新田村)・油田・西沢・佐目の4ヶ村により虎口堰が設置され、新田開発が積極的に進められていた。その時期は文禄3年(1594)から寛文2年(1662)の間と考えられている(田中2000)。虎口堰が設置された場所は酒野谷村域内であり、固定堰のため、洪水時において堰の持つ水をせき止める機能があだとなり、河川



第18図 酒野谷周辺 大芦川堤防及び土手位置図

第3節 塚西側で検出した石組について

御絵図面御裏書

下野国都賀郡酒野谷村より同郡下南摩村川除論之事、酒野谷村百姓訴趣、下南摩村之者新規三石堤築之付酒野谷村乃水損由事、下南摩村百姓答候。石堤之儀田畠之開年々致修復由、其上此所下南摩村地低候所從酒野谷村石堤式ヶ所致之故水押入候、右式ヶ所之堤可取払旨申之、双方申所地境就不分明為檢使平岡三郎右衛門手代海野半助・石黒小右衛門手代岡才兵衛差遣之遂檢分所、村境之儀實永治五年巡檢下置証文之而為歴然条不異論大足川を以可為両村之境、但川之巾央限之地境相定畢、漁業両村可為入会目又宇都木沢山境之事通西ノ峰迄墨筋引之境相定候、下南摩村築出候長四拾四間余之石堤^{新敷}相見条向後可取払之、長式抬間之古石堤^{其儘可差置之}、五拾六年以前築古堤^{可取払}由酒野谷村百姓雖申之、往年双方手形取替年數久有來上申所難立併酒野谷村百姓築候石堤之儀檢分之上不可為下南摩村之隣、此堤於取除^{酒野谷}村可致水損間可為如先規長三拾間堺ヶ所長式拾四間堺ヶ所有之、此間數之外一切不可築添之、仍^爲後証令裏書各加印判双方下置問不可違失者也。

資料1 『鹿沼市 資料編 近世!』「336・阿久津富彦家文書」

の氾濫を招いてしまう。塚の直近上流に位置する酒野谷原塚周辺（塚周辺の堤防内側は、大芦川に沿って酒野谷の中でも一番低い水田地帯である。堤防等がなければ洪水時には大芦川と荒井川が合流する水が、水田内に流れ込んでしまう位置にある。）に洪水時の対策=石堤等がなければ塚の設置に酒野谷側は合意しなかつたものと考える。そのことは、元禄6年（1693）大芦川をめぐる下南摩村・酒野谷村の川除争論についての幕府裁許の経過を見ればよく分かる（鹿沼：近世I・336）。酒野谷村は、下南摩村が新規に石堤を築造した為、酒野谷の田畠が浸水したと訴えた。それに対して、下南摩村の者は、この石堤は年々修復してきたもので、下南摩村は酒野谷村に比べ土地が低く、酒野谷村がこれまでに2ヶ所の石堤を築いたために、下南摩村に水が押し入って来たと訴えている。この争論からは、酒野谷村、下南摩村が互いに1693年の時点での自分の耕地を水害から守るために、盛んに石堤と呼ばれる堤防又は護岸施設を作っていることがわかる。川で境を接する村落では堤防を造るのに両村の了解が必要であり、塚など河川の流水に変化をもたらす構築物は特に両村の合意が必要である。特に、酒野谷村の土地に用水堰を他村者が構築する場合は猶更のことと考える。以上から、虎口塚の開削で酒野谷村と他に4ヶ村に論争がないことから、塚の直近上流にあたる酒野谷原塚周辺に石堤などの川除施設が元禄6年（1693）以前に構築されていたことが想定される。

以上難駁なまとめとなってしまったが、塚の構築状況・平面形・石堤・文献などから、本塚が江戸時代の前半の早い段階に構築された可能性があることを指摘しておきたい。

註1 栃木県立足利工業高等学地歴部 1996 「叶花古墳測量調査報告書」「研究集録」第17号 栃木県高等 学校文化部連盟社会部会

註2 手塚孝 2009「特別講演 直江兼続の治水遺構「直江石堤」について」米沢市教育委員会

手塚氏は直江石積の調査から、石積技法をA～F類に分類して時期を推定している。

A類は河原石を横に重ねて積む野面積で、平面形は巨石を中心的に、周辺に大型の礫を亀甲状に配置（江戸初期～前半）。

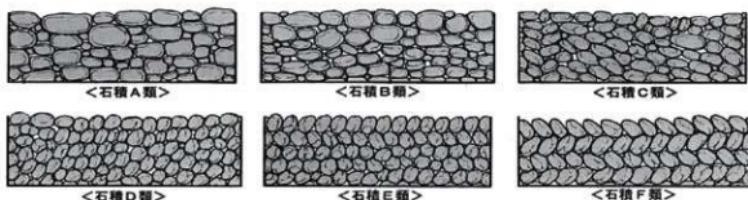
B類は河原石を隙間なく敷き詰め、野面状に積む（江戸時代前期～中期）。

C類は楕円形上の礫を縦横に組み合わせる（江戸時代中期～後期前半）。

D類は円礫を立てるように上下に隙間なく並列させる（江戸時代後期以降）。

E類は礫をハの字状に積み石する（江戸時代後期～幕末期に出現。主流は明治～大正時代）。

F類はE類と同様だが、礫に角度を持たせている（明治～昭和）。



第19図 石堤石積模式図（手塚孝文群より引用）

主要参考文献

青木健二ほか 1990『結城道東1号・2号塚』日本窯業史研究所報告第37冊 日本窯業史研究所

市橋一郎・上野川勝 1997「棚木県下の近世塚状遺構について」『唐沢考古』16号 唐沢考古会

岩瀬一夫・藤田典夫 1987『稻荷塚・大野原』栃木県埋蔵文化財調査報告第84集 栃木県教育委員会

大川清・新井潔 1994「牧場遺跡試掘調査」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報 平成4年度』栃木県教育委員会

尾島利雄他 1982『酒野谷の民俗』栃木県鹿沼市酒野谷一 宇都宮大学民俗研究会

鹿沼市史編さん委員会 2000『336・阿久津富彦家文書』『鹿沼市史 資料編 近世Ⅰ』鹿沼市

鹿沼市史編さん委員会 2004『鹿沼市史 地理編』鹿沼市

鹿沼市史編さん委員会 2005『叢書 10 鹿沼の絵図・地図』

鹿沼市教育委員会 2011『鹿沼市遺跡分布地図』鹿沼市教育委員会

小林義広 1988『山の下塚発掘調査報告書』下田村文化財調査報告書第27号 下田村教育委員会

齊藤弘 1997「足利市小保所の「叶花古墳」について」『唐沢考古』16号 唐沢考古会

宗廢秀明 1996『横小路周辺遺跡 二階堂字横小路 110番3地点』横小路周辺遺跡調査団

津野仁 2009『南浦跡遺跡・皇宮前塚』栃木県埋蔵文化財報告317 栃木県教育委員会（財）とちぎ生涯学習文化財団

長岡弘章 2005『津村遺跡』鹿沼市教育委員会

畠大介 1997「中世の治水と利水をめぐる考古学的課題」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第8集

畠大介 1998『塙川下河原堤防跡発掘調査報告書』埼崎市教育委員会

前澤輝政 1974『中里古墓群の研究』

水村孝行 1980『こども動物自然公園内埋蔵文化財発掘調査報告物見山塚群』埼玉県遺跡発掘調査報告書

山口耕仁・初山孝行 1991『鹿沼流通業務団地内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告121集 栃木県教育委員会

写 真 図 版



塚から 男体山を望む



酒野谷原塚 遠景（南西上空から）



酒野谷原塚 遠景（南東上空から）



酒野谷原塚 遠景（西上空から）



酒野谷原塚 遠景（南上空から）



酒野谷原塚 遠景（北上空から）

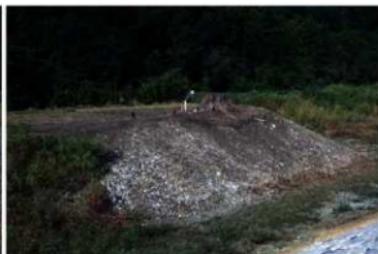
図版二
遺構全景



酒野谷原塚 全景（真上から）



酒野谷原塚 全景（東から）



酒野谷原塚 全景（南から）



酒野谷原塚 全景（北西から）



酒野谷原塚 全景（南から）

図版三
遺構



酒野谷原塚 南全景（南東から）



北側調査風景（北から）



北側A-A'土層断面（1）（西から）



北側A-A'土層断面（2）（西から）



北側B-B'土層断面（1）（北から）



北側B-B'土層断面（2）（北から）



西側礫敷検出状況（1）（西から）



南側礫敷検出状況（2）（西から）

図版四
遺構



南側礫敷検出状況（北から）



西側礫敷検出状況（東から）



南西部礫敷検出状況（西から）



水天宮鎮座位置（南東から）



参道検出状況（北から）



祠出土状況（1）（北から）



祠出土状況（2）（南から）



祠出土状況（3）（南から）

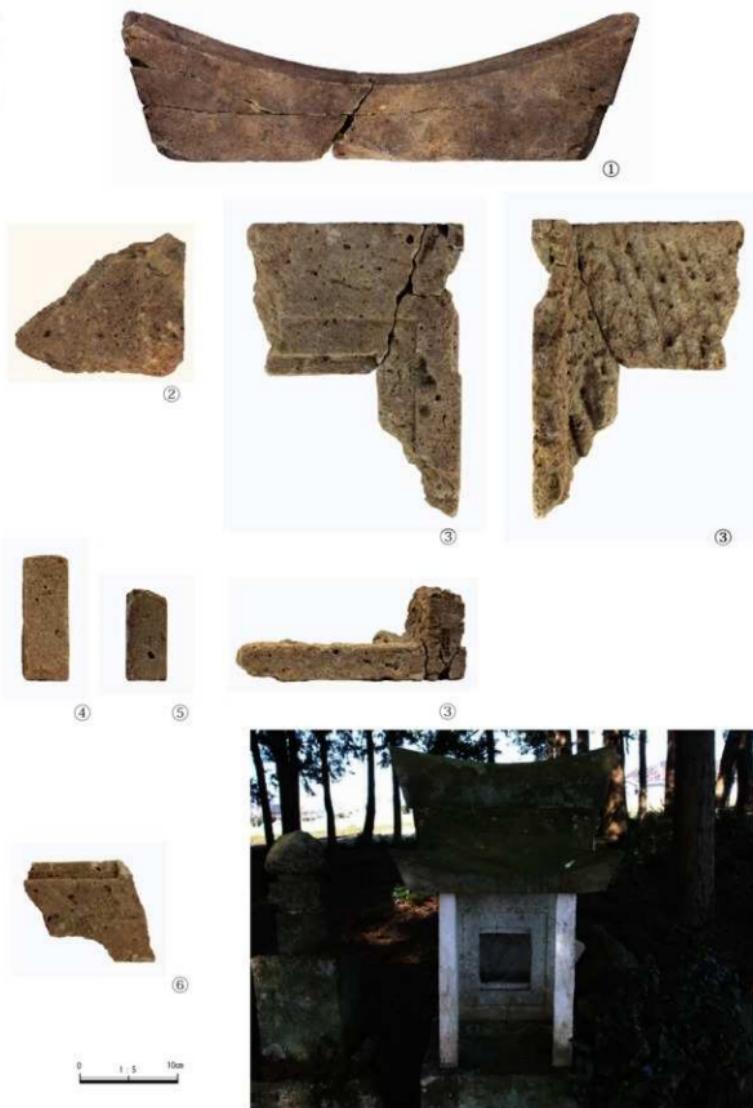


調査地点 流失前現況（北から）



調査地点 流失状況（北から）

図版六
遺物



祠①～⑥

塚東側 杉本稻荷神社内石祠 明治十五年建立

報告書抄録

ふりがな	さけのやはらづか
書名	酒野谷原塚
副書名	安全な川づくり事業費（補助）一級河川大芦川に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第398集
編著者名	植木 貴志
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2020年2月28日（令和2年2月28日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
酒野谷原塚	鹿沼市 酒野谷	262	2991	36°32'14.7" 139°43'04.6"	2019.08.01 ~ 2019.10.11	160	一級河川大芦川河川改修工事に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
酒野谷原塚	塚	近世	塚1基	石祠・陶磁器	・石敷検出 ・護岸施設の可能性がある遺構

要約	酒野谷原塚は大芦川沿岸の微高地に位置する倒丸方形状の塚である。台風19号により調査途中で遺構は失われてしまい、塚の構築時期等は明確に出来なかったが、調査途中までの成果等を考慮すると江戸時代に構築されたと推定される。本塚は構築方法で特徴的点が3点指摘できる。①塚の南側では地山に石敷きをしたうえで盛土をしている。②北側は地山を削平し、円弧状に2重に石組を組んだうえで盛土をしている。③塚中心部分はきめの細かい川砂を主体に盛土されていることが判明した。 塚の西側裾部からは、現堤防に平行する形で石組が検出された。石組は20~50cm大の河原石の側面を交互に積んでいるものと考える。石組構築時期は、ほぼ塚と同時期であり、石組は調査途中であったため不明な点も残るが、護岸施設の可能性が高いものと考える。
----	--

栃木県埋蔵文化財調査報告第398集

酒野谷原塚

—安全なづくり事業費（補助）—個別古大河川に伴う発掘調査—

発行 栃木県教育委員会

宇都宮市浦田1-1-20

TEL 028(623)3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財團

宇都宮市本町1-8

TEL 028(643)1011

編集 公益財団法人とちぎ未来づくり財團

埋蔵文化財センター

下野市篠474番地

TEL 0285(44)8441

発行日 令和2年2月28日発行

印 刷 株式会社大塚カラー
